

University  
Current  
Review

ISSN 0288-1748 2023(令和5)年 1月20日発行【隔月刊】

[特集] “コロナ世代”の友だちづくり

# 大学時報

NO.408  
2023. **01**



日本私立大学連盟

# 金沢星稜大学



群青の間テラスより



群青の間内側

## 世界へ羽ばたく学生に希望を託す「群青の間」

本学人文学部校舎、グローバル commons 最上階には広いテラスに面して作られた和室「群青の間」がある。縁側と枯山水の砂紋の正面右に春には綺麗な山桜、左に北陸新幹線の高架を望む。大階段が目立つ現代的な外観の校舎の中に、清閑な趣のその部屋は、金沢・兼六園に隣接する建物「成巽閣」の2階にある「群青の間」に由来する。

「成巽閣」は前田家十三代齊泰なりやすが、母である十二代奥方眞龍院しんりゆういんのために造らせたもので、国の重要文化財に指定されている。豪華にしつらえた内装と調度品の中には、鎖国の上に諸外国の文化から遠く隔てられた加賀藩にありながら、世界の技術や意匠も見られた。ギヤマンの窓、「群青の間」の色鮮やかな青壁に使われた顔料ウルトラマ

リンブルー※などがそれである。青として使える天然素材、ラピスラズリや瑠璃が貴石であり大変貴重なものであったことから、当時開発された人工顔料である。

本学の「群青の間」は、このウルトラマリンブルーのイメージに本学のイメージカラー「星稜ブルー」を重ねた青壁である。設計者の浦建築研究所によれば「群青の間」に使用した杉材と拭き漆は能登をイメージしたもので、同校舎1階にある会議室に使用した金沢箔や二股和紙の加賀と合わせて石川県をコンセプトとしている。

和の風韻と西洋の気韻、ここで文化の融合を学び世界に向かう、そのような人材養成に活かしたいという大学の願いを表す特別な部屋である。

※フランスの化学者、ギメが、1828年に人工のウルトラマリンの製法を発見し、1830年に工業生産された人工顔料が使用されたと推測される（江本義理、1972）。

【参考文献】成巽閣ウェブサイト <http://www.seisonkaku.com/index.html>

江本義理「成巽閣の色壁」『保存科学』9号 1972年 pp.1-14



表紙：ツバキ

ツバキ科の常緑高木。自生種がある伊豆大島、長崎県五島列島などが椿油の名産地として知られる一方、青森県の椿山と秋田県の能登山は2県にわたる「ツバキ自生北限地帯」として国の天然記念物に指定されています。12月から4月と春を迎える時期に開花することから春を告げる花とも呼ばれます。

\*表紙デザインでは教育・成長・向上を植物になぞらえ、1年ごとにさまざまな種・葉・花・実を紹介します。今年度は花のシリーズです。

76

多様な交流ができる同窓会組織であるために。「楽しい」演出とエネルギーの創出を。—TACHIBANA THANKS-DAYと込めた想い—

蘆田一毅／石原雅子

80

卒業生との関係強化の起爆剤としての事例紹介 上坂孝博

ホームカミングがもたらす豊かな時間とは

—母校はなにゆえ「マザー」であるのか— 中里則之

90

私の授業実践く教育現場の最前線からく

オンライン授業への工夫と成果 森岡大輔

加盟校の幸福度ランキングアップ《夜空と大学編》

新月の夢 加藤知

伝統文化の継承と教育

—國學院大學の観月祭における取り組み— 小林宣彦

96

「大宇宙の旅」を夢見て 河北秀世

98

クローズアップ・インタビュー

東海大学国際文化学部教授、

長野・ソルトレークシティオリピックスキー・ノルディック複合日本代表

森敏さんに聞く (聞き手) 外川智恵

106

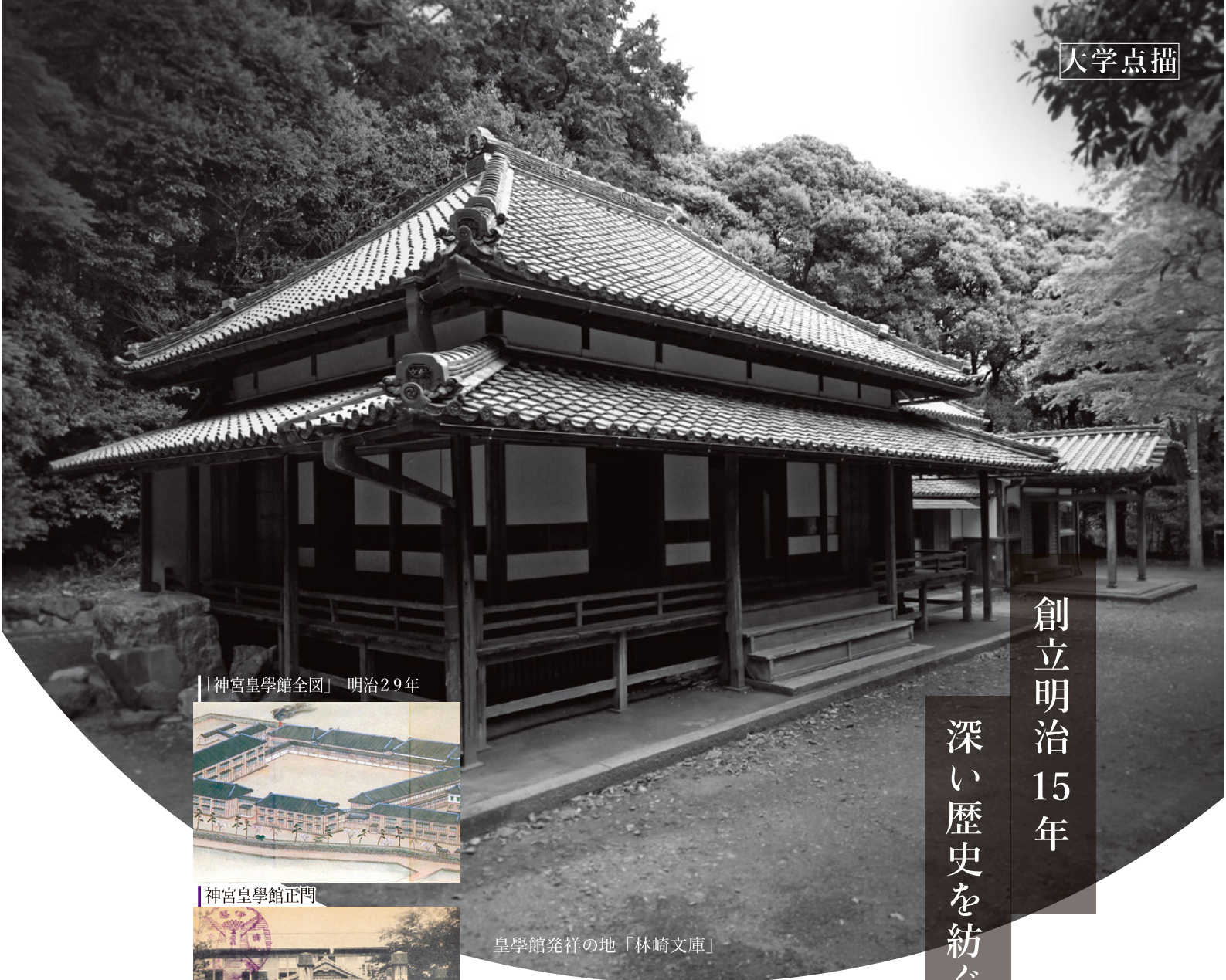
執筆者・出席者のご紹介(掲載順)

108

私大連ニュース

110

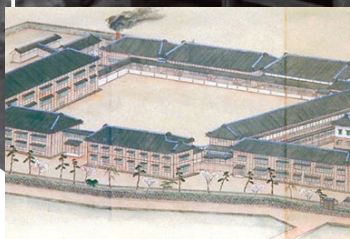
編集後記



創立明治15年

深い歴史を紡ぐ伝統校。

「神宮皇學館全図」 明治29年



神宮皇學館正門



皇學館発祥の地「林崎文庫」



初代総長  
吉田茂  
元首相

昭和37年再興時第1回の入学式



昭和57年(1982)当時のキャンパス



明治15年、神宮の学問所である林崎文庫に創設された「皇學館」を直接の起源としています。昭和21年の廃学という苦難を背負いながらも、昭和37年に新制の大学として再興を果たし、吉田茂氏をはじめ首相経験者が総長を務めました。本学は、創立140年の伝統を受け継ぎ開学以来の「建学の精神」を貫いています。

「過去に学び未来を創造する」  
全学一致の教育・研究を展開



伊勢の神宮における長い神道研究の伝統を継承しながら、  
歴史に根差した道義と学問を学び、実践しています。

 未来へつなぐ日本のこころ

皇學館大学

令和5年4月  
なりたい未来につながる  
3学部6学科19コース誕生  
「数理教育コース(中高教員)」新設

数学の面白さや奥深さを知り、学生・生徒に伝えられる数学教員の養成を開始。さらに、時代のニーズに合わせた全学部のコースを再編します。



令和5年4月  
数理・データサイエンス・AI  
教育プログラム設置

今後のデジタル社会をしなやかに生き抜けるよう、「数理・データサイエンス・AI」の素養を身に付けた人材を育成します。



令和7年4月より  
理科教員免許課程を  
開設予定構想中

数学教員の養成に続き、理科教員免許課程も構想中。数多くの教員を輩出してきた実績に基づき、学びを創造する力を育みます。



未来を見据え、時代と共に進化を続けます。



「地域と共に生きる大学」として  
地域連携プロジェクトや特別プログラムを導入。



鳥羽なかまちで地域活性化に取り組もう！（CLL 活動）



農業の魅力を発見！南紀みかん援農隊プロジェクト（CLL 活動）



夏期語学研修（カナダ・ヨーク大学）



「広報いせ」特集記事制作プロジェクト（CLL 活動）

歴史と文化に恵まれた伊勢の地を舞台に、学生たちがさまざまな活動を通して地域の課題解決に取り組んでいます。地域や地元企業と連携し、見て、触れて、感じながら仲間と共に学ぶ。多くの経験を通し、一人ひとりが自分らしく生きる道を見つけています。

本学の活動と特徴あるプログラム

- CLL 活動 Community Learning Labo
- グローバル人材育成プログラム
- 公務員コンプリート・プログラム
- 心理系エキスパート・プログラム

創立  
140  
周年

皇學館大学

## 創立140周年・再興60周年

—— になりたい未来につながる3学部6学科19コース 令和5年4月よりスタート! ——

文学部	神道学科	神道・宗教文化コース
	国文学科	国語学・国文学コース 国語教育コース(中高教員) 書道・漢文学コース 図書館司書コース
	国史学科	国史総合コース 歴史教育コース(中高教員) 歴史文化財コース
	コミュニケーション学科	英語コミュニケーションコース 英語教育コース(中高教員) 心理学コース 情報コース
教育学部	教育学科	初等教育コース 幼児教育コース 保健体育コース(中高教員) 数理教育コース(中高教員)*
現代日本社会学部	現代日本社会学科	経営革新コース 地域創生コース 福祉展開コース

※令和5年4月新設

皇學館大学

〒516-8555 三重県伊勢市神田久志本町1704 Tel. 0596-22-0201

University Current Review

# 大学時報

2023.01 / NO.408



## 創立140周年を迎えて

河野 訓 皇學館大学学長

皇學館大学は1882（明治15）年に創設されて以来、今年度で創立140周年を迎えた。今日まで本学の歴史を紡いできた先人に感謝するとともに、一層の発展を期して教育改革を推し進めたいと考えている。

本学の建学の精神に深く関わる日本の歴史・文学、また宗教・文化の研究を深く考究するとともに、地域の知の拠点として教育界、神社界、企業や自治体などに貢献し、地域の未来を切り拓くことのできる人材の育成に努めたい。

## DXに必要な文理連携——私立大学の役割

田中 愛治

日本私立大学連盟会長、早稲田大学総長



新年おめでとうございます。今年の当連盟加盟各大学のご発展と、各大学関係者の皆様のご健勝とご多幸をお祈り申し上げます。

昨今、日本ではDX（デジタル・トランスフォーメーション）の遅れに懸念が高まっています。その解決には、対症療法的な施策よりも、日本の教育システム全体の問題と捉え、抜本的な改革を中長期的な視点で実施する必要があります。その際に、日本の大学の約8割が私立大学で、日本の大学生の約8割が私立大学生であることを念頭に置けば、私立大学の担うべき役割が大きいことは論を待ちません。

だからといって、早急に私立大学の多くの学部を理工系の学部に変換しても、成果が上がるまでに時間がかかり過ぎます。また、短期間に質の高い理工系の教育を提供できる教員を多数養成することは困難です。あるいは、データサイエンス学部を開設しても、せいぜい数百名の学生が、データ科学の専門的知識を得て卒業するだけです。日本社会全体のDXの遅れを解消できないと考えられます。

必要なのは、人文社会系の学部学生の多くが、統計学やデータ科学の基礎を理解して、社会に出てからエビデンスベーストな議論ができるように育てる文理連携の教育です。そのためには、人文社会系の学部学生にも、統計学の基礎を教え、AIを用いてビッグデータの解析ができるような、教育プログラムを用意することです。現在、私立大学の多くがそうした学修環境を提供できるように、学部・学科を再編して、柔軟に社会のDXを支える「良き理解者」であり「賢い利用者」を育てようと新たな試みを模索しています。その際には、オンラインによるオンデマンドの教育

コンテンツを利用するなどの方法により、他大学の協力を得て実現できる場合もでてくるでしょう。

しかし、その実現には、二つの障害があります。一つ目は、東京23区内の大学の学部・学科の新設や定員増を禁じる規定です。私立大学の約7割が人文社会系という現状を踏まえれば、その大きな部分を占める東京23区内の私立大学の学部・学科の再編や定員変更を認めなければ、DX教育の進展は望めません。この点の規制緩和が必要です。

二つ目の障害は、私立大学文系の学部を受験しようとする高校生を、早いうちから文系の生徒として理系科目の学習から遠ざける、中学・高校および受験産業の教育システムです。文理隔離の受験教育は、大学に進学した後の人文社会系の学生が、データ科学を学ぶ意欲を削いでいます。受験数学の問題を解くのが苦手であったから、自分はデータ科学を学べないと思いついて人文社会系の大学生のいかに多いことか。大学においても文理隔離でなく、文理連携の教育を学生に提供すべきです。

そのためには、大学入学共通テストを全国の私立大学も利用できるように、現在の1月実施から12月の実施に変更する必要があります。多くの私立大学が利用すれば、同テストの財政的な自立も可能になります。さらに、多くの私立文系の学部が、基礎に当たる数学Ⅰ・数学Aを入試の要件に課して、大学入学共通テストを利用すれば、日本中の人文社会系の大学生の多くが、データ科学の「良き理解者」かつ「賢い利用者」になり得るのです。

ただし、大学入学共通テストを、78・9点は合格で78・8点以下は不合格というような合格を分ける手段として用いるべきではありません。一定の基礎学力が確認でき、自分の大学の当該学部への授業についてこれると分かれば、あとは私学の建学の精神に基づく学部独自の基準（たとえば、社会貢献意欲や、芸術性、創造性、数学的論理性など）により、可否を判定できます。毎年2月に実施される大学の一般入試の結果だけで、若い人の人生の進路を定めてしまう入学選抜の方式と決別しなければ、日本の大学で学んだ人々が、社会に出て国際的な競争力を持てるようにはならないでしょう。長期的には日本の教育システムの抜本的改革が必要なのです。

# 市民社会としての私立大学

辻中豊 東洋学園大学学長

はじめに

私立大学は、日本最大のNPO（広義のNPO、民間非営利組織）であり、市民社会の組織である、と言うと、少し不自然というか不思議な感覚を持たれるかもしれない。日本ではいまだに「市民社会」はこなれない、何か落ち着かない言葉のようだ。

高校の新科目「公共」が導入される際、文部科学省の諮問機関の審議過程で、筆者が「『市民社会』という用語をもっと教科書で用いた方がいいのでは。『主権者教育』よりは『市民教育』、『公民』よりは『市民』という用語を用いませるか」と、社会で普通に用いられる言葉を推奨した時に感じた場の違和感は、忘れることができない。NPOの参加者から支持いただいたものの、座長をは

じめ他の多くの参加者の間には、その言葉を使わない暗黙の了解があったようだ。NPO法と呼ばれる、特定非営利活動促進法案（1998年、平成10年3月25日法律第7号）が審議された時に、当初、市民活動と呼ばれたものがこの「特定非営利活動」といった用語になったのも、「市民」や「市民社会」が言葉として避けられたからだ、というのは政治学的には有名な話である。

現在の私立大学が、任意の民間団体、市民社会として発足し、市民集団のミッション（建学の理念）に基づく高等教育機関として成長していったことは歴史的な事実だと思われるが、現在もこうした認識が共有されていないのかもしれない。市民意識にあふれた福澤諭吉の慶應義塾（1868年）、初の民党からの総理・大隈重信の早稲

田大学（東京専門学校、1882年）など、日本の近代市民社会の創始者たちだけでなく、明治大学（明治法律学校、1881年）、法政大学（東京法学社、1880年）、中央大学（英吉利法律学校、1885年）、日本大学（日本法律学校、1889年）、國學院大學（皇典講究所、1882年）、同志社大学（同志社英学校、1875年）など1918年の大学令によって1920年に発足した旧制私立大学の出発点である学校も、さまざまな立場からではあるものの、明治期の自由民権運動など市民社会の形成に関連するものと見ることができらるだろう。

## 1. 市民社会としての東洋学園の建学

自由民権期に続く大きな市民社会形成のうねりは、大正・昭和デモクラシーと呼ばれる時期にあった。東洋学園の出発点はこの時期である。

東洋学園大学は、現在、文京区本郷にキャンパスを持つ、3学部（現代経営学部、人間科学部、グローバル・コミュニケーション学部）4学科、1大学院からなる中規模大学である。また、東洋学園の出発点は、1926（大正15）年に日本で最初に女子歯科医学専門学校として文

部省指定認可を受けた東洋女子歯科医学専門学校である。前身としての明華女子歯科医学講習所は1917（大正6）年に創設されている。女子の自立を支える高等教育の本学園が誕生したのは、まさに大正・昭和デモクラシーの最中であったと言えるだろう。

創立者の宇田尚は東洋思想に基づく実業家であり、決して欧米的な市民社会理念を共有する思想家ではなかったが、日本女性の資質を高く評価し、それを伸ばすことが大切であると考えていた。「女性が職業を持って経済的に自立し、本来の才能を伸ばすことができれば、男性に隷属することなくその存在を示すことが可能になる。新しい時代の女性は家政万能に徹した良妻賢母であると同時に、職業を持ち社会の一員として社会に貢献すべきである」という主張を持ち、場合によっては良妻賢母という社会通念さえ否定することもあった。

## 2. 自彊不息（じきょうふまず）の精神

また、宇田は、易经に見られる「自彊不息」を建学の精神として、好んで学生に伝え続けた。「一日とて、努力することを怠つては、重責を果たす専門家にはなれない」、信

頼される専門家となり、自立と自律のできる人間になり、社会に貢献せよと励ましたといわれている。この自彊不息の精神は、女性の自立、市民としての自立に通じるものがある。東洋的な思想の上だが、この意味で市民社会理念を共有していたのだ。

その後、学園は戦災を経て戦後となり、今度は、「将来英語を以て職業とする女性に対して、一般教養の涵養かんようと、実用英語の修得に重きを置く大学教育」機関として、1950年に東洋女子短期大学として再出発した。ここでも、女性の経済的自立を可能にする職業教育を授けるという創立者の精神は受け継がれた。東洋学園大学は、この短期大学を母体に、1992年には4年制共学の東洋学園大学に、2008年には大学院を設置し、2013年には3学部4学科1大学院の現体制へと発展した。学園そのものが、自彊不息の精神で、自らの新たな社会的フィールドを見だし、日々努力して、現在に至っている。

### 3. 市民社会と民間非営利組織

さて、この中規模というより小規模の私立大学の学長として初年度をなんとか乗り切りつつあるものの、私立大

学の新しい視点を提示するには経験、能力ともに不足しており、学長としてではなく、40年余りの一政治学研究者としての視点から、私立大学を捉え直してみたいと思う。

一つの視点として議論したいことは、私立大学をはじめ多くの日本の民間非営利組織、団体が、明確に「市民社会」として自らを位置付け、言葉に出して再認識することが重要ではないか、ということである。それは、これから私立大学が持続可能な形で存在価値を発揮し続けることにつながるだけでなく、さらに日本の社会や政治に新鮮な認識をもたらすのではないか、ということだ。言葉に出すことが、人々の認識を変え、その実質化につながるのではないだろうか。

さて、2022年は、コロナ禍が続きながらも、世界的には、オミクロン株以降、徐々に行動制限が緩和されてきた。それ以上に世界を驚かせたのは、ロシアによるウクライナへの侵攻であり、戦闘要員だけでなく数千人以上といわれる相当数の民間市民の犠牲が報じられている。

コロナ禍での対策・政策を巡って、市民社会、とりわけ非営利組織の果たす役割が注目された。私立大学もワクチン接種などで大きな役割を果たした。ウクライナ支援



でも多くの私立大学で学生受け入れが行われた。

ロシア(および少数の同調国)とかつてソビエト連邦時代には同じ連邦に包摂されていたその他の旧ソ連諸国、東欧諸国との、ロシアの侵攻への態度、そのもとなる自由民主主義への態度の違いも、大きくクローズアップされた。ロシアの侵攻と自由民主主義への各国民の態度の違いは、その国を取り巻く安全保障環境だけでなく、非営利組織を含む市民社会の違いに基づくことが大きいと考えられている。

#### 4. 日本の市民社会・民間非営利組織の世界での位置

40カ国以上の広義のNPO＝民間非営利組織＝市民社会の規模を比較したレスター・M・サラモン教授たちの著名なプロジェクト(ジヨンス・ホプキンス大学、市民社会研究会センター「比較データ2017年」、日本の統計は2004年現在)によれば、日本の市民社会セクターの労働力(被雇用者およびボランティア)は641万人で、アメリカ(1445万人)に次いで絶対数で2位。また、そのうち教育分野は81万人で、アメリカ、インドに次いで3位となっている。この順位は被雇用者数だけでも同じである。

この研究の出発点になった12カ国比較研究『台頭する非

営利セクター』(レスター・M・サラモン/H・K・アンハイアー著)は、1994年(日本版は1996年、ダイヤモンド社)に出版され、日本の非営利組織研究、市民社会研究への火付け役となったものである。そこでも、日本の非営利組織は行政的制約を受けて相対的な比率は低いものの、雇用と支出における絶対数ではアメリカに次いで2番目に大きな規模を持っていることが強調されている。

日本の民間非営利組織において大きな位置を占めるのは、雇用面では、大きい順に保健・医療、社会サービス、そして教育。支出面では、教育、保健・医療、社会サービスである。教育分野には、私立大学、私立の小中高等学校等が含まれている。

こうした調査が行われた時期と前後して、日本ではNPO法の施行(1998年)、公益法人制度改革(2000～2008年)における一般社団・財団など法人格取得の容易化と公益認定の切り離し、準則主義による非営利法人の登記での設立、主務官庁制廃止、公益認定要件の実定化、中間法人の統合、既存の公益法人の移行・解散などがなされ、いわゆる政府・行政からの制約は緩やかになったとされている。とはいえ、私立大学など

学校法人への公的規制は相変わらず厳しいものがある。

## 5. 日本の市民社会の特徴

私立大学だけではないが、日本の非営利組織やさまざまな団体は、市民社会の一員であるとの自己認識が低いようだ。国連など国際機関や、欧米を中心とした世界の各国（中国やベトナムなど社会主義圏を除く）では、民間非営利組織は市民社会の重要な部分と考えられている。

市民社会の一員であるとの自己認識が低い理由の一つは、日本では国家行政の政策遂行に関連する部分のみ非営利組織として承認されてきた（少なくともNPO法や公益法人制度改革までは）という、明治以降の歴史があるようだ。

もう一つは、一般市民のそうした非営利組織への参加、参加意識が低いことである。日本人は、「政策提言なきメンバー達」（ロバート・ペッカネン著『日本における市民社会の二重構造』2008年、木鐸社）である、集団に参加しているが、アドボカシー（政治・政策的な、もしくは社会的な主張）はしない、参加していても活動しない、また参加していても「参加意識」が低い、などの特徴付けを行った研究もある。

市民社会であることを意識しない非営利組織や団体に

ついで言えば、自治会・町内会やそれに関連する子供会、老人会、婦人会、スポーツ団体などもそうだ。全国の市区町村に存在する30万の自治会・町内会は、日本が世界的に見て最も発展させている住民自治組織である。大震災や洪水など自然災害においても、防犯などさまざまな社会問題の解決においても、大きな役割を果たしている団体だが、人々の参加意識は年々低下し、特に21世紀に入っ  
て急減し、7割近くから2割台（公益財団法人明るい選挙推進協会調査）になっている。

900組合、延べ6700万人以上が加盟する生協などの消費者団体は、日本最大の組織された集団であり、世界的にも最大規模だが、人々には消費者団体に参加しているという意識はなく、第7回世界価値観調査（2017～2021年）では、わずか0.1%が「加わっており活動している」と回答し、調査48カ国中最低だった。人々にとって生協は購買サービス組織であって、消費者団体としては考えていないようだ。

この文脈では、民間の非営利医療機関（医療法人・病院）や私立大学を、日本人は市民社会とは意識していない、と推察されるだろう。

## おわりに―私立大学の市民社会としての役割

しかし、私立大学など民間非営利組織は、やはり他の国々同様、市民社会の重要な担い手ではないだろうか。

日本全国に615ある私立大学は、795の全大学の77%を占め、全学生のおよそ4分の3を教育している（2020年）。こうした高等教育での機能だけでなく、実際に、他の多くの市民社会の非営利団体、組織、市民と国内外で連携し、活動しており、日本社会の多元性やアドボカシーに大いに寄与している。コロナ禍でも、またロシアのウクライナ侵攻においても、さまざまな社会的、公共的な課題に対して、私立大学は市民社会として重要な役割を果たしてきている。全ての市民社会は、市民的公共の担い手であり、市民的な自由・民主主義の担い手であり、自由民主主義的な政治社会の基礎であると再認識すべきではないかと思う。

日本私立大学連盟 私立大学ガバナンス・コード「第一版」には、「1.自律性の確保」、「2.公共性の確保」、「3.信頼性・透明性の確保」および「4.継続性の確保」の四つが挙げられている。これらは、補助金など公的資金が投入され文部科学省からの指導があることや、一連の不祥事があり、そ

れらを払拭するため、といった消極的な理由ではなく、より本質的に市民社会の民間非営利組織としての市民的、公共的性格を担保するため、と位置付けるべきと考えられる。



左：東洋女子歯科医学専門学校 第三代校舎（1928（昭和3）年築／撮影1937（昭和12）年（推定））  
右：同地に建つ現在の東洋学園大学 本郷キャンパス

# コロナ禍の学生生活

— 課外活動を切り口として —



## MEMBER

齋藤 勝

法政大学学生センター長、  
文学部准教授

和氣 節子

神戸女学院大学学生部長、  
文学部教授

岡田 龍樹

天理大学副学長、  
人間学部教授

北條 英勝

武蔵野大学副学長、人間科学部教授、  
私大連学生生活実態調査分科会長

音好 宏

司会  
上智大学文学部教授、  
広報・情報委員会大学時報分科会分科会長

## 学生生活実態調査から 見えてきたこと

音 新型コロナウイルス感染症の流行により、大学でさまざまな制限が始まった2020年に大学に入学した学生もすでに在学3年目を迎え、大学生生活としての時間は後半に入っています。これまで、本誌座談会では、コロナ禍に関連して、オンライン授業、学園祭、留学、修学支援などをテーマとして取り上げてきましたが、今回は学生生活、特に課外活動をテーマに皆さまにお話をお聞かせいただきたく思います。学生生活にとって課外活動は大きなファクターの一つです。課外活動の充実、学生の学生生活に対する「満足度」にも大きく関わるほか、活動を通じて得られるつながりはもちろんのこと、学生の個性の成熟や協調性、行動力、社会性の発達の養成において重要な役割を果たします。

これまで、キャンパスでの活動に対する制限に伴い、制約が避けられない状況が続いてきましたが、社会全体で行動制限の緩和が進む中で、状況は変化しつつあります。私大連では、4年に1度「学生生活実態調査」を

実施しており、2022年10月に『私立大学学生生活白書2022』がまとめられました。まずは、この調査に関して継続的に関わっている北條先生に調査結果から見えてきたことを教えていただきたく思います。

**北條** 武蔵野大学副学長の北條です。私大連では、学生生活実態調査分科会の分科会長を務めており、2021年度9月から10月にかけて、第16回の「学生生活実態調査」（以下、実態調査という）を実施しました。その結果、さまざまな知見が得られましたが、中でも興味深かったのが、所属学部・学科の満足度と正課教育の満足度がコロナ禍にあっても上昇した点です。その一方、これまでも低下傾向にあった学生生活の充実度がさらに低下していました。これは、本日のテーマである課外活動と深くつながっているように思います。また、学業に関する悩みを抱える学生が増加しているという結果が得られましたが、これはオンライン授業の導入などにより、学びの継続性という点に学生の関心が集中したことが背景にあると考えられます。それに対して、友人関係の悩みは減少傾向にありました。特に、コロナ禍以降に入学した現在の2・3年生でその傾

向が顕著でした。これは、キャンパスの入構制限や課外活動の制限により、学内滞在時間が大きく低下したことが反映されているように思います。

**音** 神戸女学院大学では課外活動に関してさまざまな支援を行っていると聞いています。学生部長を務める和氣先生に具体的な取り組みについてお聞きしたいと思います。

**和氣** 2021年2月末日の緊急事態宣言解除を受



け、法人の危機管理委員会が活動基準を見直したことに応じ、3月より課外活動を、屋外↓教室↓体育館と3段階で人数や時間、回数に制限を付けて認めていきました。部独自の細かい感染対策を作成し、大学に提出してきた6団体はすぐに活動を再開させていました。

本学では、学生の課外活動を奨励することを目的として、顕著な活動や成績を収めた自治会登録団体、またはその団体に所属する個人に贈られる「大学クローバー賞」、そして同窓会組織である公益社団法人神戸女学院めぐみ会から、建学の精神にふさわしい課外活動を行っている団体に対して贈られる「めぐみ会賞」を設けています。今年は3年ぶりの対面での大学祭で、これらの表彰式を行いました。コロナ禍が続き、部員不足や今後の活動方針に悩む団体が多いのですが、そうした状況下でも諦めずに頑張ってきた団体が今年度も受賞しました。例えば、ラクロス部は朝練のみを行い、午後からは自由活動にしているそうです。部長の呼び掛けに部員が応答し、的確な判断力と自身と仲間を信じる気持ちで、新たな可能性を生み出した、ロールモデルとなる学生たちを表彰することができました。



## 部員の減少が与える影響

音 天理大学の岡田先生はいかがでしょうか。

岡田 本学は新型コロナウイルス感染症緊急対策本部会議を立ち上げ、課外活動を含めた活動基準を策定して対応に当たってきました。しかしながら、コロナ禍初期の2020年8月にラグビー部で集団感染が発生してメディアで報道されることとなりました。ラグビー部は全寮制であったことから、寮内で感染が拡大しました。他にも、硬式野球部、ホッケー部、柔道部の学生も寮生活を行っており、そこでの感染を防ぐため、その後も長期間対応に追われることとなりました。ただ、幸いだったのが、本学は天理教を経営母体とする大学であるため、キャンパスがある天理市内の参拝用の宿泊施設を利用できたことです。感染者、濃厚接触者、合計100名以上を寮から宿泊施設に移し、個室で隔離することができました。このように、地域と教団、大学が一体となって困難を乗り越えた結果、ラグビー部は2020年度の第57回全国大学ラグビーフットボール選手権大会で全国制覇を果たすことができました。し

かしながら、コロナ禍の収束が見えず、現在に至るまで祝賀会のような部員を祝福する機会を作れていないことを残念に思っています。

部員の増減については、体育会系ではさほどの変動はありませんでしたが、文化系は非常に厳しい状況です。学生団体を紹介するクラブオリエンテーションができなかったこともあり、部員が集まらず、活動もままならない危機的な状況が今も続いています。自治会活動についても懸念しています。コロナ禍以前に入学した現在の4年生と、コロナ禍に入学した1〜3年生が過ごしてきたキャンパスライフは、大きく異なります。通常のキャンパスライフを経験しているのは現在の4年生だけで、1〜3年生は大学祭も経験していません。今年11月、3年ぶりに対面での大学祭が開催され、自治会の学生が頑張って準備を行ったのですが、対面イベントの経験が少ない1〜3年生はどのように関わっているのか分からず、4年生がサポートに苦労したと聞いています。このように、今まで継承されてきたノウハウが途絶えてしまうという問題に対しても対策が必要だと考えています。



## 学生の主体的な学びと 対策への期待

齋藤 法政大学では2020年2月から理事会を中心に危機対策本部会議を立ち上げて、課外活動を含めたコロナ対策を議論してきました。課外活動は、レクリエーションという側面だけでなく、そこで築かれた友人



和氣 節子氏

関係や先輩・後輩関係がインフォーマルな形で正課授業のサポートにつながるという側面も持っています。そのため、課外活動の場はできるだけ維持していきたいという方向で意見が一致していました。しかし、緊急事態宣言が発出されたことから、新入生歓迎会も開催できず、人間関係を築けない新入生が多く出てきてしまいました。大学としてもそれに危機感を覚え、オンラインで交流イベントを実施するなどの活動を繰り返しましたが、やはり参加する学生が限定されてしまうなど、限界を感じたのも事実です。そこで、状況次第で中止になってもやむを得ないという前提で、できる限り対面でのイベント開催を実現できるように努力する方針をとりました。

その後、2020年9月に新入生歓迎会、11月には対面の大学祭も開催し、多くの学生に参加してもらうことができました。21年、22年と開催し続けてきましたが、結果的にイベントによる感染拡大は起きていません。完璧とは言わずとも、こういう対策を取れば感染を防げるということが分かってきたのです。

課外活動についても段階的に制約を緩め、2020年10月に入ってから大学祭に向けての準備や練習は基本

的に全て認めるようにしました。ただ、参加者名簿の提出、使用する部屋の制限人数の厳守や換気の徹底、また参加を強制しないことや家族の了承を得るなどの条件を課しました。2021年度までは学内の感染状況や感染対策について2週間に1度、全学に発信していましたが、本学は規模が大きいこともあり、全ての学生や団体に周知を徹底することは難しい。そのため、基本的には学生が自分たちで主体的に学び、考え、対策できるように努めてほしいというのが本学の基本姿勢です。

## 課外活動への参加率に表れる

### コロナ禍の影響

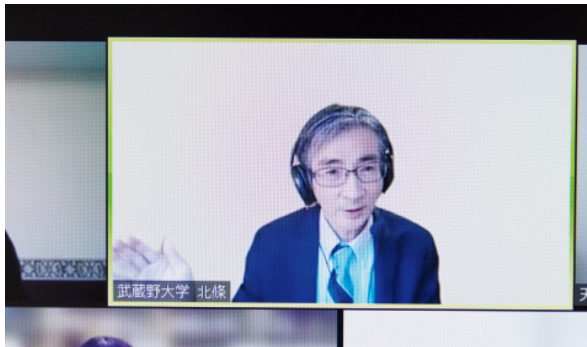
**音** 各大学のリアルな現状をご報告いただきましたが、実態調査と照らし合わせて、北條先生はどのように感じましたか。

**北條** 部活動やサークル活動の参加率に注目すると、積極的に参加している学生の割合は28・7%と、2017年度調査と比べると14ポイント程度落ちていま



北條 英勝氏

す。また、課外活動に最初から参加していないという学生の割合が、17年度は22・2%だったのに対し、21年度では32・7%と10・5ポイント上昇しています。このことから、全体的に課外活動は低調になったということが分かります。特に、コロナ禍の始まりだった2020年度入学生、現在の3年生（回答時は2年生）ではその傾向が顕著で、通常の大学生活を1年間送ることができた



現在の4年生にはそれほど大きな影響が見られません。本学でもそうした傾向が明らかなのですが、学生支援課によると、大学祭実行委員会や自治会組織である学友会のメンバーの人数には大きな変動はないそうです。その理由を聞いたところ、両団体は大学の学生組織の中で極めて重要な位置付けにあり、大学として

も機能しないと困るため、大学のポータルサイトを使って新入生を募集するなど、かなりのバックアップをしていることが要因として考えられるということでした。そう考えると、大学側が課外活動をサポートできるところが、まだあるのではないかと思います。その一方で、齋藤先生がおっしゃるように大学が手取り足取りやってしまうと、課外活動を学生が自主的に作り出していくことの良さが損なわれてしまうのではないかと思います。という危惧もあります。

**音** 一時期に比べると行動制限も緩和されてきましたが、コロナ禍が完全には収まっていない状況で、今後、課外活動に対してどのような支援を行っていくべきかご意見をいただきました。ありがとうございます。

## コロナ禍だからこそ 新たな“ガクチ力”

**和氣** 就職活動の早期化に伴い、インターンシップへの参加に対する相談件数が増えたのですが、エントリー



シートへの記入が求められる。学生時代に力を入れたこととに不安を抱く学生が多くいます。ガクチカとも略され、就職活動には切り離せないものとなっていますが、課外活動や、登録者には大学からメールで情報発信されるボランティア活動等に取り組みなかったため、そのガクチカに書ける経験がないと思ひ込み、インターシップへの参加自体をためらってしまう学生が多いことを非常に懸念しています。

しかし私は、コロナ禍によって、人と自由に会えなかった分、会って話せる時間を濃密にしようという意識を持った学生が増えたように感じています。たしかに、課外活動の制限で思うように活動できなかったかもしれないませんが、だからこそ、対面で会えることが貴重なチャンスだという意識が出てきて、さまざまなディスカッションで積極的に自分の意見を伝え、人の意見を全身で傾聴し対話しようとする学生の姿が多く見られます。こうした学びの基本的な姿勢の再確認がガクチカにつながることに気付いてほしいですし、この未曾有の状況を乗り越えた経験こそが、これからを生き抜く力になっていくということを伝えていきたいです。

**音** 「大学時報」第401号(2021年11月号)の座談会でNHK「大学生とつくる就活応援ニュースゼミ」創刊編集長の松枝一靖さんをお招きした際、学生時代に力を入れたことを自分の言葉でうまく説明できる学生とできない学生の差が広がっているとお話ししていたことを思い出しました。それでは、岡田先生はいかがでしょうか。

**岡田** 本学のある奈良県天理市は人口約6万人で、本学には約3000人の学生がいます。本学は天理市と包括連携協定を結んでおり、行政とは良好な関係を築いていますが、やはり自治体や地域への配慮は欠かせません。そこで、課外活動でもこれだけの規制や対策を行っているということを報告し、自治体や市民の理解を得ながら活動を行う必要があります。

2020年に全て停止した課外活動を再開する際には、私と学生部長、校医の3人で全ての団体を回って感染防止に必要なことを説明しました。また、寮も視察して対策状況を確認しました。しかし、やはり学生が自覚して個々に対応してくれないことには、いくら大学側が注意喚起しても効果はありません。言われたこ

とをやるだけでなく、しっかり自己管理できなければ、スポーツでも勝てない。だから、日々の生活を通して、スポーツでも通用する強さを身に付けてほしい。そうした方向で、運動部員たちには自覚を促しました。

文化系の団体や自治会活動に関しては、経験のない学生たちが集まってゼロから新しいものを作り出せる可能性もあるのではないのでしょうか。これまでの活動を



岡田 龍樹氏

見直して、型にはまらない新たな学生の活動が始まるのであれば、本学としても積極的に支援していきたいと思っています。

## コロナ禍を機に起きた 課外活動の新陳代謝

**齋藤** コロナ禍が追い打ちをかける形になりましたが、2010年代から課外活動に参加する学生の数は減少傾向にありました。なぜそうした傾向が見られるのかをまず考えなくてはならないと思うのですが、その大きな理由として就職活動が挙げられます。インターンシップは3年生から始まりますし、3年生の春学期から就職活動に取り組む学生もいる。そのため、2年生で課外活動をやめてしまう学生も多いのです。また、幹部のような責任を負う立場になりたくないという理由で早めにやめてしまう学生もいる。実際、コロナ禍では団体の幹部は感染の責任を負うという大変な立場に立たされました。そうした中で、実は大学主



齋藤 勝氏

催のイベントに参加する学生は増えているのです。その背景には、大学が責任を負ってくれるし、ただ参加して帰ればいいという気楽さがあるようです。しかし、学生の主体性を育ていく上で、そうした在り方には不安を覚えます。

実際、コロナ禍以降、歴史のある大規模な課外活動団体がいくつか解散しました。理由を聞くと、コロナ禍

以前から運営がうまくいっておらず、すでに寿命がきていたのではないかとのことでした。その一方で昨年末あたりから、新しいサークルを作りたいという声が増えてきます。例えば、旅先でランニングをする〆旅ラン〆サークルのようなこれまでになかったサークルです。また、サッカーサークルは多数あったものの女子が参加できないところばかりだったため、女子サッカーサークルを作りたいという要望も上がっています。このように、コロナ禍を機に、課外活動の新陳代謝が起きているように思えます。これまで存続してきた団体を支援していくことも大事ですが、新しい活動を学生とともに育て上げ、今の時代にあった形を模索していくことも大切なのではないのでしょうか。

**北條** 実態調査では、今回、新たに「現在の心身の状況」を調査項目に入れました。そのデータを見ると、コロナ禍以降に入学した現在の2・3年生では、心身の調子が良くないという比率が高くなっています。特に、現在の3年生では、調子が悪いと答えた学生が25・9%と4分の1以上に及んでいます。これにはさまざまな理由が考えられますが、オンライン授業も大きな影響

を与えていると思います。実はオンライン授業が良い影響を与えた学生もいれば、悪い影響が目立ってしまった学生もいるのです。例えば、対人関係が苦手な学生においては、オンライン授業によって成績が向上したというケースも報告されています。対面授業が再開された中で、そうした学生にどのような影響があるのかを見極める必要があると考えています。私の印象としては、対面授業で教室に入ってきた際、あいさつをする学生が、コロナ禍以前より目に見えて増えました。対面の価値を再発見した出来事でしたが、課外活動においても、声掛けや面談を行うなど、対面であることを生かしたささいな努力で改善できる点があるのではないかと思います。

また、「不安や悩みの相談先」として、友人や先輩を挙げる学生が減少しており、一方で、家族に相談する、あるいは誰にも相談しないと回答する学生が増えています。この結果も学年との相関があり、コロナ禍前、対面状況で入学してきた学年の学生の方が、友人や先輩に相談する比率が高くなっています。こうした人間関係に対する学生の微細な変化を捉えてサポートするこ

とも、授業だけでなく、課外活動支援においても必要になると感じています。

## 学生の新しい挑戦を 支援していきたい

**音** 最後に、今後、コロナ禍が収束していく過程で、課外活動に対して大学はどのような方針を示していくべきなのか、皆さんから提言をいただきたく思います。

**和氣** 現在、友人とつながることができた学生と、できなかった学生に二極化するような状況が生まれていますが、その両者に大学側が対応することが必要だと考えます。孤立した学生には、欠席が多く、履修単位数が少ない傾向がありますが、そうしたサインに早く気付いて、こちらから声掛けできるように、2012年発足の学内連携システム「学生支援ネットワーク」と各学部事務室とを、より密接に、かつ合理的に協働させていくプロセスの拡充を検討しています。また、一方で仲間と新しい企画を立ち上げようとしている学生に

は、団体に所属しているかどうかにかかわらず、しっかりと学生の自主性をバックアップする。そのために本学ができることは、学生たちが次のステップを選択する際の判断材料となる正確な情報をできるだけ収集し提供することです。スチューデントファーストに重きを置いてきた本学としては、今後も学生の心に寄り添ったサポートを続けていきたいと考えています。

**岡田** 私は教育学を専門としていたこともあり、学外で市民活動を支援したり、地域学校協働活動を推進するなどの活動を続けてきました。コロナ禍はそうした活動にも大きな影響を与えてきましたが、注視していると活動状況が2つのパターンに分かれることに気が付きました。特に地域学校協働活動では顕著でしたが、コロナ禍を理由に活動をやめてしまう地域と、必要なことから工夫しながら頑張つて続ける地域に分かれるのです。大学の課外活動も同様で、学生がやる気を持って取り組めば継続できますが、もう大変だしいんじゃないかと思えば消えていくという状況にあるのではないのでしょうか。

先ほど、学生が新しく立ち上げる活動に期待した





音 好宏氏

いというお話がありました。実際、ノウハウがないと戸惑ったり、失敗したりすることもあるでしょう。しかし、そうした経験を積むのも非常に大事なことだと思います。失敗を恐れずに挑戦する学生に対して、失敗を失敗のまま終わらせないように大人がフォローし、時には失敗も良しとする。大学としてはそうした支援をしていきたいと思えます。そして、就職活動で大学時代

に何をしてきたか問われた際、失敗を糧に努力したんだと、コロナ禍があったからこそこんな活動ができたんだと胸を張って言えるような学生が増えてくることを願っています。

## 大学と学生が共に 守っていくべき価値

**齋藤** オンライン化が新しい局面を作るという意見もありますが、やはり大学というのは人と人が出会う場であり、交わる場です。そこで、喜びが生まれることもあれば、苦しいこともあり、悩むこともあると思います。人はそうして育っていくものであり、その価値は永遠に失われないし、失ってはいけないものだと思います。それは、大学だけでなく、学生も一緒になって、みんなを守っていかなくてはならないものではないでしょうか。グローバル化が進めば、コロナ禍のようなパンデミックが再び起こる可能性があります。その時、同じことを繰り返さないように、何が失敗だったか、何が成功だったかを

しっかり整理して未来に引き継がなければいけない。自分たちの子どもが大学に入った時に同じような苦しさを味わわないために、何ができるか考えなければいけない。そのための経験として、今回のコロナ禍とどう向き合うべきかを今後も学生に問いかけていきたいと思えます。

## ポストコロナに向けて 学生と向き合う

**北條** 実態調査の結果から、コロナ禍により、学生生活においてさまざまな側面で差が生じたり、特徴が際立ったりしてきたことが見て取れました。しかし、そのような状況下で、学生たちは前向きに生きるためにいろいろな試行錯誤や挑戦をしてきたはずです。そうした体験が学びになり、自省性が深まるなど、成長につながっていることもたくさんあるのではないのでしょうか。それに教職員がどれだけ向き合い、どこまで気付けるかが問われているように思いました。コロナ禍で、大学は非常



に大変な問題突き付けられてきましたが、学生もまた問題を突き付けられているわけです。しかし、そうした状況は、逆に新しいものを生み出すチャンスだとも言えます。これまでの大学には、良い面も悪い面もあったはずですから、このチャンスを生かして、ポストコロナ時代の新しい大学、新しい学生生活を作っていければと思います。そのために、コロナ禍を理由にして逃げるのではなく、前向きな気持ちで、個々の学生にあらためてしっかり向き合っていくことを大切にしていきたいと思っています。

**音** 皆さまから非常に前向きなお話をいただき、価値のある座談会になりました。先生方、本日は誠にありがとうございました。



na generation

# 「コロナ世代」の友だちづくり

大学という多くの可能性に溢れる空間での対人関係の構築は、さまざまな背景を持つ人々との交流を求められる社会人への準備期間として、また、社会で必要とされるソーシャルスキルを磨き、自身のアイデンティティを確立する機会として、重要な意味を持っている。

感染症の流行がはじまった2020年春、学生生活は大きく変化した。人と人との接触を回避すべく、キャンパスへの入構は制限され、学生たちは憧れのキャンパスライフとは程遠い孤独な生活を突きつけられたのだ。

いまだ感染症収束の見通しが立っていない中、各大学は感染状況を考慮しながら対面授業を再開するなど、アフターコロナに向けて大学の活気を取り戻そうと努めている

## CONTENTS

### 居場所づくりが必要になった大学

石田 光規

早稲田大学文学学術院教授

### コロナ禍における学生への対応

幸田 拓也

福岡大学学生部事務部学生課



# Friendship of coro

る。その一方で、学生生活にうまく馴染むことができないまま今に至る学生や、生活が「対面」に切り替わっていくことに戸惑いを覚える学生も少なくはないのではなかろうか。「失われたキャンパスライフ」が残した課題は根深く、大学は手探りで活路を見出そうとしている。

対人関係を構築した経験や、そこから得られた学びは、学生の成長や進路選択に大きな影響を及ぼすと考えられている。今まさに大きな変化の渦中にいる学生に向けて、大学は何をすべきなのか。本特集では、各大学の取り組み事例の紹介を通じて、感染症が学生たちのキャンパスライフに与えた影響等を振り返り、コロナ禍を生きる学生たちにとっての「友だちづくり」の意義について考える機会としたい。



キャンパスライフの旅を歩む

「My Journey」の取り組み

東洋大学

学生PRワーキングチーム

新たな交流企画で学生の孤立を防ぐ

—DWCLA Pray & Hikeの

取り組みを中心に—

村上恵

同志社女子大学学生支援部長・

生活科学部食物栄養科学科教授

入学前の友だちづくりサポート

—TOGAKU Meet & Greet

(トীগクミーグリ)—

渡邊 紳也

東洋学園大学入試広報センター入試室課長補佐・

ましましプロジェクトリーダー

共通教育での学修を通じた

友だちづくり

高野 嘉寿彦

信州大学学術研究院総合人間科学系長・

全学教育機構長



## 居場所づくりが必要になった

### 大学

石田 光規

早稲田大学文学学術院教授

#### 1 友だちに否定的なことは言えない

「友だちとケンカをしてしまうと修復の機会がなさそうで怖い」

これは、私のゼミの学生が読書会の際に発した言葉である。読書会に参加しているすべての学生が賛同していたので、決して珍しい考えではないのだろう。昨今の大学生は、これほどまでにはかない友人関係の中で大学生活を送っている。

私たちが友だちづきあいの中に、頑健さではなくはかなさを見いだすようになったのは、2000年代あたりからのことだ。物的に豊かになり、個々人の意見を尊重する機運が増すと、私たちはいろいろな物事を選択できるようになった。

友だちづきあいもその限りではなく、中学校・高校のよ

うにクラスのない大学では、特に選択の余地が増していった。今や、どのような人とどのように付き合うかは、それぞれの選択に委ねられている。

付き合う相手を選べるようになれば、私たちは、お望みの相手と好きなように付き合うことができる、と思うだろう。しかし、冒頭の大学生の発言を見ると、現実にはそうなっていないように感じる。むしろ、友だちづきあいに、必要以上に気を遣っている姿が浮かび上がる。

なぜ、このようになってしまったのか。答えは簡単だ。付き合う相手を選ぶ権利は、私のみならず周りの人も持っているからである。

私が付き合う相手を選ぶことができるように、あなたも付き合う相手を選ぶことができる。このような社会で付き合う相手、すなわち、友だちを確保するには、相手から友だちとして選んでもらわなければならない。

友だちとして選ばれるためには、相手に魅力的だと思ってもらうことが肝要だ。かくして大学生は、さほど興味がなくとも流行の歌をチェックし、みんなにウケるネタを仕入れるようになる。ケンカなどはもつてのほかだ。ケンカを含め、つながりの中に否定的な材料を注ぎ込む行為は、友

だち関係の存続を脅かすのである。

大学生は、友だち関係を維持するために、互いに対立を避け、気を遣いあいながらキャンパスライフを送っている。その一方で、過剰な気遣いにより成り立つ関係は、「友だち」といって疲れる」状態を引き起こし、本音の行き場所や居場所の問題を引き起こす。ゼミ、サークル、アルバイトなど多数の集団に所属していても、「本音を出せる場所がない」と語る大学生は少なくない。

## 2 人間関係の棚卸しと接触の選別

このような中、世界はコロナ騒動に巻き込まれた。「人と会うこと」を不要不急の範疇に取り込んだコロナ禍は、付き合う相手の選別傾向、すなわち、「接触の選別」を加速させた。その仕組みはこうだ。

コロナ禍に突入し、「新しい生活様式」や「不要不急」が声高に叫ばれる中、私たちは「人間関係の棚卸し」をいっせいに始めた。なかなか人と会えない中で、それでも会うべき人はどのような人なのか、国民全員が一斉に考え出したのである。

その結果、直接会うに足る魅力に欠ける人は、つながりから排除されていった。まさに「接触の選別」とでも言うべき現象が、この三年弱の間に引き起こされたのである。

「人間関係の棚卸し」や「接触の選別」の影響は、大学生に対して特に深刻であった。多くの大学生は、入学後にはゼロベースで自らの友だち関係を再編する、という課題を背負う。しかしながら、多くの人が付き合うべき相手を見直し、接触を限定してゆく中で、新しいつながりをつくるのは容易ではない。

初対面の人と友だち関係を築くには、共に行動し、会話をする必要はある。しかし、コロナ騒動の渦中には、おいそれと人を誘えない。声をかけた相手から「常識のない人」と思われる可能性があるからだ。

先にも述べたように、誰かと友だちになるにあたり最も避けるべきは、否定的評価である。会話や外食に対して、相手がどのようなイメージを抱いているかわからない中で誰かを誘うのは、勇気のいることだ。

コロナ前に友だちづくりの機会を提供してきた懇親会も、公には禁止され、会食は、若干の後ろめたさを伴う「ヤミ行為」になった。「人間関係の棚卸し」や「接触の選別」

が進む中、あえてこの時期に対面で会おうとする相手は、高校の頃に仲のよかった人など、すでに気心の知れた相手に限られてくる。3年経ってもマスクを外した顔を見たことがない、という関係は決して珍しくはない。

コロナ騒動も3年目に入ると、キャンパスを闊歩する学生の大半は、コロナ対応下にある大学しか知らない。当然ながら、孤独感や心理的な不安を抱える学生は増え、早稲田大学でも学生相談の件数は増している。とくに地方出身者は、新しいつながりもできず、かといって、これまで仲良かった友だちにも会えず、という状況から体調不良に陥る人が多い。

行動の選択肢が増す大学生活は、自ら動かなければ友だち関係からも置いていかれがちだ。コロナ禍により自由な行動は制約され、なおかつ、選別の傾向は増している。そこにコロナ禍がもたらしたもう一つの産物、オンライン化が加わり、友だちづくりは一層難しくなった。

### 3 選別を加速させるオンライン

周知のように、大学のみならず日本社会では、コロナ禍

を経てオンラインでの交流が急速に増えていった。

そもそも、日本国民の多くがスマートフォンを手にした時点で、オンラインで交流する環境は技術的には整っていた。とはいえ、私たちはオンラインよりも対面の交流を「いいもの」と考えていた。

コロナ禍はオンライン行動に関する時計の針を一挙に進め、オンラインの交流を文化としても許容しうる土壌を生み出した。オンラインの交流が文化として受け入れられたことで、私たちは人と何かをするにあたり、オンラインで済ますか対面にするかを考えるようになった。

このような社会で人と顔を合わせて交流するには、直接会うに足る理由をそれぞれが用意しなければならぬ。オンラインで事足りると判断された物事は、電子的なコミュニケーションに置き換えられてゆき、「接触の選別」はますます進んでゆく。

大学の授業のオンライン化が進んでゆけば、選別はさらに加速するだろう。授業を媒介に学生が何気なく集まっていた時代は過去のものとなり、目的や気分を共有する者だけが会うようになる。何気なく大学に行き、授業に出て友だちをつくるという行為は、オンライン化の動向に



よっては難しくなるかもしれない。

#### 4 集まる場所を確保する

今や大学が「何気なく」集まれる場所を「意図的に」つくりなければならない時代になりつつある。「何気ない」ものを「意図的に」つくり出すというのは、言葉として矛盾しているが、そのような時代にさしかかっているのだ。放っておいても誰もがキャンパスに集まっていた時代とは違う。

人と会わなくてもよい環境が整備されれば、私たちは誰かに会うときも「会うに足る目的」を欲するようになる。一見合理的に思える目的をベースとした交流は、目的から外れた人を排除し、場に息苦しさを生み出すこともある。

誰かと会う目的を一生懸命に準備し、その目的を満たすよう努力して友だちの輪に入り込む。そのような付き合いは、時に重苦しいものにもなる。だからこそ、目的や役割といったものから離れ、ただ集まれる・立ち寄れる場所をつくる必要がある。

とはいえ、目的や役割を問わない場所をつくるのはことのほか難しい。目的や役割を問わない場は、その性質ゆ

え、そこに立ち寄る理由までも奪ってしまおう。日々忙しく、目的ベースで物事を考えがちな大学生が、立ち寄る理由のない場にわざわざ足を向けるとは考えがたい。したがって、目的や役割を問わない場所とはいえ、学生が足を向ける工夫は必要だ。手取り早いのは学生に必要な活動と居場所の機能を連結させることである。

取るべき方策は大学の置かれた状況により異なるだろう。学業が学生を結びつける触媒になる大学もあれば、カフェが機能する大学もある。その点を見極めるためには、まず、学生の状況を精査することだ。大学がキャンパスの中に学生の居場所をどのようにつくっていくか。そのようなことを考える時代になりつつある。

# na generation

## コロナ禍における

## 学生への対応

幸田 拓也

福岡大学学生部事務部学生課

### はじめに

福岡大学は「建学の精神」に基づく「全人教育」を目標とし、9学部31学科、大学院10研究科34専攻を擁する総合大学として88年の歴史を紡いできた。また、文理融合が衆目を集める今般の大学業界において、全学部が一つのキャンパスに集うという利点を最大限に活用し、真理と自由の追求を通して自発的で創造性豊かな人間を育成し、社会発展に寄与する人材の輩出を最大の使命として、日々、教育・研究・医療の質的向上に取り組んでいる。その中で、正課外の活動である学友会活動も大学教育の一環として捉え注力しており、目標の体現においても大

変重要な役割を果たしている。

本学学友会は総務委員会を中心に学術文化部会、体育部会、愛好会、その他公認団体等から延べ200を超える団体で構成され、予算折衝や大学執行部との交渉、自治行事の開催・運営等、各分野において学内外で幅広い活動を展開している。中でも「新入生歓迎オリエンテーション」は年度の始まりとともに実施される一大行事で、特に新入生に向けた包括的サポートの場および全学友会間の親睦融和の機会として位置づけられている。

以下、コロナ禍における生活様式の変化や感染状況に応じて変移する活動制限に柔軟に対応しながらも、精力的に活動を展開するオリエンテーション実行委員会の取り組みを紹介したい。

### 1 学生の心的変化と 新入生歓迎オリエンテーションの意義

全国的に猛威を振るう新型コロナウイルス感染症は本学にも多大なる爪痕を残した。特に、入学直後から登学が一切できなかつた現3年次生以降はオンライン化の影響

## Friendship of coro

を受け、同じ志を持つ学友との対面での交流機会を喪失したことで、心的距離の乖離が拡大し、その影響から今なお、対人関係の構築を非常に難儀なものと感じている学生が多いように見受けられる。そのような状況を改善すべく立ち上がったのが前述の総務委員会を中心に結成されたオリエンテーション実行委員会である。例年、組織されている委員会ではあるものの、コロナ禍を通じて変化していく学生たちの様相を一番近くで見えたため、その敏感な変化を肌で感じている分、従来の慣習にとらわれず、企画の本質を見直すことの重要性を意識し、「今の新生が何を求めているのか」を徹底的に追究することで、コロナ禍での実施に向けての一步を踏み出した。特に注目すべきは新入生歓迎ピクニックの実施と学友会独自のWebサイトの運用開始である。

まず、新入生歓迎ピクニックは初めて親元を離れて新生活を始める新入生の不安を早い段階で少しでも解消すること、そして4・6年間を通じ支えあうことができるかけがえのない学友との最初の出会いの場を提供することを主たる目的に毎年4月中旬の日曜日に実施している。例年の参加者は約1000人で、2018年より長崎県

佐世保市のハウステンボスで開催している恒例行事であるが、コロナ禍以降初の開催となった令和4年度は、参加者を50%にまで制限し、換気や検温等の徹底した感染症対策を万全に講じることで安全・安心な運営を行った。学内では体験できない多くの活動は、不安を抱えている新入生にとって大変意義のある時間となった。参加者からは学部学科を越えた交友関係を構築できたとの感想が寄せられ、日々の生活を鮮やかに彩ることができた点において、一定の成果を上げている。また、令和4年度は感染対策の観点から、別日程で学内開催となったが、例年はこのピクニック中に部活動や愛好会の団体と協力し、歓迎ステージの時間を設けることで、団体は日頃の鍛錬の成果を発揮し、新入部員の獲得を行う。一方で、新入生は活動の様子を間近で見ることができ、学生時代の全てを捧げて取り組む活動と巡り合うことができる等、企画への参加が双方にいい影響を与えている点も非常に評価できる。

次に、学友会独自のWebサイト運用の評価するべき点は、「コロナ禍で変化している学生の本质を見極めた」とことと、「学生自治で創り上げた」ものである点だ。学生たちとのやりとりを重ねる中で、確かに多くの学生は対面での

交流機会を喪失したものの、講義や情報発信等のすべてをオンライン化したことで、従来の学生と比較すると機器操作に抵抗を感じにくい傾向にあると感じた。当時の実行委員会はこの点に着目し、どの学生も必要な情報を手軽に入手でき、なおかつ分からなければ気軽に問い合わせることができる窓口をサイト内に設けることで、学生たちへのサポートについては学友会間の交流機会の創出を図った。また、大学はインターネットでさまざまな情報の発信を行っているが、ログイン方法の煩雑さや使用される言葉が学生にとっては難解に感じられる等の理由から、見ない学生が多数いることが現状としてあった。一方、学生が学生のために作成し、学生自治の範疇で運用する当サイトは前述の問題を幾分か解消し、今に続く交流の礎を築くことができた点を評価することができる。

## 2 大学側の評価と今後の展望

ここまで、オリエンテーション実行委員会の活動事例を紹介してきたが、大学としては新入生歓迎オリエンテーション企画を「学生自治」の観点から高く評価している。

入学までの大学の魅力アピールや入学後の資格取得支援・経済的支援・就職支援等については既存の制度が整っているが、ステークホルダーである学生たちの敏感な変化や交友関係についての悩み・不安は、教職員が関与できない私生活において、特に現れる部分であり、同じ目線に立つことができて、価値観や考え方の違いから同じ立場で対応することが難しい等の理由から、大学の直接的なサポートが現実的ではないという課題がある。

しかし、本学では学生有志が自主的・主体的にこの課題解決に向けて取り組む風土が代々受け継がれており、特にコロナ禍を経て、本質を見極めることの重要性和慣習からの脱却を念頭に置いた学生の学生による学生のための活動が拡大していることから、今後、コロナ世代の学生たちの新しい交友関係の構築へ、無限の可能性を感じている。また、新入生歓迎オリエンテーションにおける多様な企画は、新入生の不安解消につながり、大学生活を教職員と学生の双方で全学的にサポートできる、言わば「教職員協働」が形成されているとすることができる。今後、学生自治を尊重しつつ、慣習に縛られない自由な発想に基づいた学生の自治活動を通じて、多くの学生が学部横

断的な関係性を構築し、新しい環境の中で有意義な学生生活を送ることができるようになることを期待している。

### おわりに

今般、「みんなと一緒に何かに取り組む」よりも、留学やインターンを通して個を磨く「個人至上主義」が主流となりつつある複雑で多感な学生を抱える時代に突入したともいえる状況にある。しかし、本学の新入生歓迎オリエンテーションは長きにわたり受け継がれる歴史と伝統を次の世代に受け継ぎつつも、慣習にとらわれることなく、本質を見極めることでコロナ禍における新たな友だちづくりや交流の在り方を見出すことができる企画として無限の可能性があると考える。学生自治の定義は難しく、教職員のサポートの在り方に最適解を導き出すことは社会情勢や世代間の考え方の違いからも不可能に近いが、何はともあれ先入観にとらわれず、学生らしい機転に溢れた思考のもと学生が学生のために手を差し伸べることで、学生による学生のための活動が展開されていくことは、本学が掲げる「人らしき人」を育成するという全人教育の体現

であるに他ならない。今後も学生を取り巻く環境はめまぐるしく移り変わり、それに伴う対応を多くの場面で迫られ、心的な変化もさらに多様化していく中で、学生自治のさらなる充実と交流のきっかけとなる新入生歓迎オリエンテーション企画の展開に期待していきたい。

## キャンパスライフの旅を歩む 「My Journey」の 取り組み

東洋大学

学生PRワーキングチーム※

### 1 東洋大学教育DX推進基本計画

東洋大学では、2021年1月に「学生ひとり一人の成長を約束するため、デジタルを十分に活用した学修者本位の教育の実現を目指し、大学全体の教育の高度化と質保証を十全にする」という方針のもと、「東洋大学教育DX推進基本計画」を策定した。具体的には、「入学から卒業まで一貫した教育情報のデータ統合とAI解析結果の最適活用」「オンラインキャンパスとオフキャンパスの学習スタイルの高度化と多様化」「建学の精神の具現化を目的としたリカレント教育の世界展開(国内地域含む)」といった計画のもとに、学修者本位

の教育の実現を目指す多様な取り組みを展開している。

同計画の取り組みの一つとして、スマートフォンアプリの開発と教育・学生支援の向上に繋がるデータの利活用に着手している。具体的には、キャンパスライフに欠かせない重要情報を学生が適時適確に把握できるようにしたり、学生自身の成長の振り返りや自己省察の機会を柔軟に行えたりするなど、情報取得の利便性や学習意欲の向上に資するよう取り組んでいる。DX(Digital Transformation)は、既存事業の効率化と新しい価値の創出に大きく分かれるといわれる。今回の主題は、コロナ禍の友人づくりであり、DXの詳細を述べる場ではないが、本学の教育DXの取り組みは、学生を中心に据えた柔軟な学びの機会をもたらすという新しい価値創出に比重を置いていると捉えている。

前述のスマートフォンアプリには、学生自身が履修する授業時間割等を確認する機能もあり、よく使われているが、大きな目的は、学生たちが肌身離さず持ち歩いているスマートフォンを活用し、大学と学生との接点をつくり出すことである。学生が何に困っているのか、何を求めているのか、3万人の学生たちの声を把握し、その声をもとに教

職員らが連携し、教育やキャンパス環境において必要な改善を図っていくことにある。

従来、学生の声や学習・生活状況を把握するには、学期ごとの成績状況に加え、定点観測的に年に一度、または数回、在学生向けのアンケートを実施したり、卒業時にアンケートを行うなどして、学生の傾向を包括的に把握し、必要に応じて対策を考えるといった対応が行われてきた。しかし、学生本位の学習環境の整備や学生支援を行っていくためには、十分な把握ができていたとはいえない。とりわけ、コロナ禍においては、学生は感染リスクだけではなく、社会環境が激しく変化する状況のなかで、さまざまなリスクと向き合って生きている。

大学は、学生の状況を適時把握し、教職員がその場合で必要な判断を繰り返しながら、最適な支援ができるように、常時観測型に切り替えていく必要があると考えている。

一方、自己省察は、本学の建学の精神である「諸学の基礎は哲学にあり」という、根本的な理念にも通じるものであり、物事の本質に迫り、自己を見つめ、磨いていく、人間的な成長過程の営みは、東洋大学の教育において伝統的

な考え方である。学生は多種多様な経験を重ねながら成長していく。その過程で自己を見つめるタイミングは、大学側が決めるものでもなく、また画一的な仕様のもので行うものでもない。自分自身で掴むものである。自分の目標は何か、入学時はどんな思いや考えたのか、この先、自分は何をすべきか、といった自己省察の習慣を身に付けていくことが必要である。計画の副題として「3万人の Learning Journey」の羅針盤となるCJMS(Campus Life Management System)」と表現したのは、学びの旅、キャンパスライフをこのアプリとともに歩み、必要な情報を自分自身で掴み、自己を見つめながら、学びを深めていく学生生活を実現してほしいと願ったことであった。

## 2 「学生との距離を大切にし、 学生たちを主役にする」思い

「東洋大学教育DX推進基本計画」は、学長、常務理事、学部長、関係事務部長らで構成する委員会組織の下、教職員を中心としたワーキングチームがさまざまにつくられ、部署間を越えた学内連携集団を形成しながら、進めている。

# na generation

2021年5月には、複数のワーキングチームが編成され、その一つとして、学生と関わり合うワーキングチームがつくられた。当初は、学生から意見やアイデアを聞こう、アプリを使ってもらうための周知活動をしよう、といった趣旨に留まっていたが、活動を進めるに連れて、「学生たちが何に困っているのか本当に把握できているか」「私たち職員は、本当に学生のことを理解しているのだろうか」「分かっているつもりで業務をしているが、もしかしたら事務が管理しやすいようにしているだけじゃないか」という疑問を投げかけ合い始め、学生本位とは何か、大学事務の原点を考え直す会話が多くなっていった。

同年10月頃には、学生や教員を対象に200名を超える個別ヒアリングを行うことを決め、全学会議でも合意した。ひとり一人の声に耳を傾け、困っていることは何か、学びを充実していくために行っている工夫は何か、学びに対する姿勢や考え方の一つひとつを拾い集めていくことに時間が掛けられていった。学生たちには、アプリの要望も訊いたが、学生たちの熱意やコロナ禍の現状を目の当たりにし、ワーキングチームの意識は、今をどう見つめ、学生たちをどう支えるかに、段々と重点が置かれていった。

そして、同年12月頃、中心メンバーの職員から「アプリを提供するだけではなく、コロナの影響で失われた時間を学生たちに取り戻してあげたい」「大学って何をするといいのか、勉強するために来るのは間違いないが、それだけではないはず」「僕らが生み出す時間が学生のためにならないれば意味がない」「学生たちに活気がなければキャンパスではない」という意見が出された。あらゆる部署から集まった職員たちはコロナ対応も含む通常業務と並行しながら、「学生との距離を大切にし、学生たちを主役にする」企画の検討を始めることになった。

### 3 My Journeyチームの発足とセルフリーダーシップ

「あくまでも主体は学生だ」「学生たちが自分たちで企画、運営していく・・・しかもこのコロナ禍で学生たちを集めるのか」「職員は、どこまで学生の企画に加わるのか」「学生間でトラブルが起きることも想定できる。しかもこの繁忙期にだぞ」。さまざまな意見が飛び交ったが、他の職員も参画し、部署間を越えて互いに知恵を出し合い始



# Friendship of coro

めた。

計画全体の責任者である矢口悦子学長に企画内容を相談したときのことである。学長は、ワーキングメンバーにこう述べた。「職員さん同士がこうして学生を真ん中にして繋がり合っている。これは理想的な姿」「Learning Journeyという表現を用いた計画でもあるのだから、学生自身の旅の始まり、『My Journey』という企画名はいかがでしょうか」。学長にも背中を押されたこの企画はスタートすることが決定した。

企画会議は、通常業務時間の合間、または終業後にオンラインも併用しながら進めた。前述のワーキングチームの中心メンバーからは、「やはり、学生主体であることや、学長の語る学生自身の成長の旅、My Journeyの発想、そして何より、建学の精神にある『独立自活』を体感することじゃないか」「企画する学生、参加する学生、活動をサポートする学生が居てもいい。とにかく学生たちに語りかけよう」といった議論がなされ、学生自身のセルフリーダーシップ(自分自身を率いていく能力)を引き出す、学生主体による学生同士が繋がり合う企画にしようという意見がまとまった。

決まってからは動くのが早く、結束力が高いのが東洋大学職員の良さである。企画学生の募集説明会、WebフォームやYouTubeを用いた企画エントリーの準備、サポート職員の配置や、オンラインチャット形式での相談スペースの作成といった、さまざまなことが各部署のノウハウを生かし、瞬く間に進められていった。

年が明けた2022年1月、ハイブリッド形式で行われたMy Journey企画説明会には、32名の学生が参加した。企画の趣旨と最低限のルールのみを学生たちには伝え、その後は学生たち同士で話し合う。解散時間が過ぎても学生たちは話し合い、職員たちは、ただひたすら見守っていた。こうしてついに、キャンパスを越え、第一部・第二部や学部、学年の境目のない、7つのMy Journeyチームが発足した。

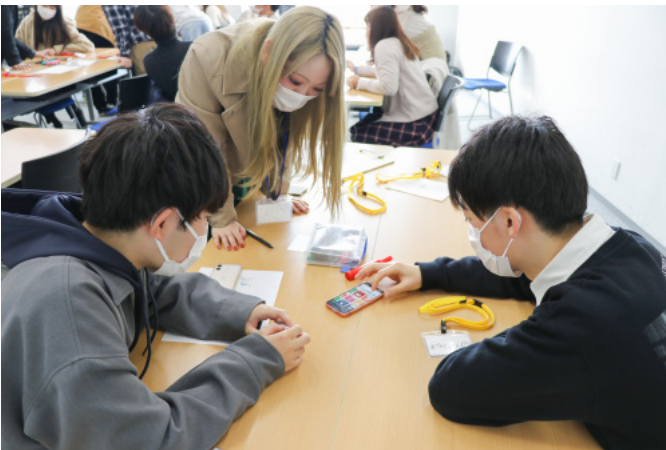
## 4 My Journey Week

「企画は何とか年度内に行いたい。実施は3月上旬だ」。学生たちは、わずか1カ月弱の期間で、企画検討と参加者募集、そしてイベント実施まで行う。

チームごとにさまざまなことが起きる。企画内容がまともまらないチーム、学生同士で深夜までオンラインで企画会議をするチームもあった。焦る学生たちからは、判断が難しい要望や意見が出たこともあった。

チームを支えた職員の一人はこう振り返る。「企画を成功させようと準備を進める学生は、私が想像していた何倍も熱を帯び、輝いていました。そんな学生による『My Journey企画』に気が付けば私自身も職員として成長させてもらい、記憶にも思い出にも残る日々となりました」。

そして、2022年3月上旬から中旬にかけて、7つのイベントが実施された。当日、職員はほとんど手助けを行わず、学生自身が主体となり、感染対策も自分たちで工夫して講じながら実施し、延べ



学部や学年を越え、学生たちが繋がった My Journey 企画の様子

170名の学生たちが参加した。一方で、オンラインと対面のハイブリッド形式で実施したチームは苦労も多く、また企画の難易度を上げて挑戦したチームは参加者が伸びないこともあった。それでも「たとえ一人しか参加しなかったとしても納得いくまでやろう」と心意気をもって臨む学生たちの姿は、まさに My Journey という自分自身の学びの旅を歩む者そのものだったと思える。

### 5 新しい風が吹き始める

My Journey チームの企画終了後、解散イベントを行ったが、すでに友人の繋がりをもっている彼らは、イベント終了後も交流を深めていった。そして、嬉しい声が届く。My Journey チームの学生たちが「新入生を歓迎する企画を入学式で行いたい」というのだ。また、入学式業務を担っていた職員からは「せっかくなら、新入生たちを喜ばせようよ」という声が上がった。学長もこの声に賛同し、My Journey チームの代表らが日本武道館に集まって、新入生歓迎企画が行われた。こうして、「学生に、充実したキャンパスライフを送ってもらい

たい」という思いは、学生と教職員が一体となった行動によって形となった。

My Journeyチームの学生は、さらに新たな繋がりを生む。学部授業の一環として、アプリの利用状況に関する研究チームが学生主体で結成され、「学生たちのために作ってもらったアプリの活用をもっと促したい。また機能も改善したい」と、学長に相談に来る学生が登場した。学生たちと学長との対話が続いてきたことにより、学生主体で公式Twitterの運営を始めることになった。キャンパスライフをもっと良くするアイデアを出し合う企画や活動が、学生たちの手で進み始めている。



入学式新入生歓迎イベントを実施した学生たち

話は大きく変わるが、先日、ある運動部の対外試合が都内で行われた。その応援席には、My Journeyチームの学生たちの姿があった。学生たちは笑顔で応援しながら、大学の校歌を心で歌う。

コロナ禍における学生生活を支える職員、特に学生対応部署は精神的な負担も多かったはずである。しかし、この活動は、誰かに指示されたものでもなく、職員が自分たちの心と体で学生たちの熱意を感じ取ったことが原動力であった。学生主体で業務を考えることは、この先の大学づくりで必ず生きる原点だと気づき始めた今、部署を越えた職員間の対話も増え、現場に新しい風が吹きつつある。

最後に、この活動に理解を示してくれた学生や教職員各位に深く感謝したい。

※ 東洋大学「学生PRワーキングチーム」

市橋篤、伊藤岳人（経営学部教務課）・齋藤隆郎（学生支援課）・

椿雅人（卒業生・雨水会連携推進課）・宮本靖子（赤羽台事務課）・

小森花緒梨（法学部教務課）・高塚央紗武（学長事務課）・

河部剛士（広報課）・雨宮聖矢（就職・キャリア支援課）・

矢野智子（高等教育推進支援室）・

石川瑛士、大迫慎、新山文洋（デジタル活用推進本部事務局）

\*部署名は2022年3月当時の所属で記載

## 新たな交流企画で 学生の孤立を防ぐ

### —DWCLA Pray & Hikeの 取り組みを中心に—

村上 恵

同志社女子大学学生支援部長・  
生活科学部食物栄養科学科教授

#### はじめに

同志社女子大学は、京田辺市に京田辺キャンパス、京都市内に今出川キャンパスの2校地を有し、6学部11学科、1専攻科、5研究科を擁する女子総合大学である。現在、約6100名の学生が学び、毎年約1500名の新入生を迎えている。

本学では入学後1週間、新入生オリエンテーション期間を設けている。期間中、学生生活案内、創立者墓前礼拝、新入生交流会、クラブ紹介、学科ごとの交流プログラム

など多くの行事が開催され、新入生が友人を作り、大学生活に一日でも早く慣れるようにサポートをしている。また、これらの行事は、各学科の在学生からなる「新入生オリエンテーションリーダー」により支えられている。

新入生オリエンテーションリーダーは、毎年秋に在学生を対象に募集を行い、各学科10名、30名が活動をしている。12月に研修会を開催、学生支援部長による「同志社女子大学案内」、宗教部長による「礼拝の意味・礼拝の持ち方」のほか、カレッジソング、学生生活上の諸制度の確認に加え、外部講師によるリーダーシップトレーニング研修を実施し、自分なりのリーダー像、オリエンテーションリーダーとしての心構えを養う機会となっている。研修会を終えたオリエンテーションリーダーたちは、学科ごとに準備を重ね、オリエンテーション期間中、新入生の誘導や各行事の補助、履修の相談など親身になって新入生を支えてくれている。このように本学では毎年、新入生同士の「横のつながり」だけでなく、上級生との「縦のつながり」の構築にも尽力している。

しかし、2020年度は新型コロナウイルス感染症拡大のため、入学式を含むすべての行事が中止、学生証の交付

や履修方法など最低限の説明のみを行い、その後、学内への入構すら禁止せざるを得ない事態となった。楽しみにしていた大学生活を突然奪われた新入生に何ができるのか、模索が始まった。ここでは、2020年秋から新たな交流企画としてはじまった「DWCLA Pray & Hike」の取り組みを中心に紹介したい。

## 1 創立者墓前礼拝

新島襄・八重夫妻を

はじめ、同志社創立に尽力された方々が眠る同志社墓地は、若王子神社から山道を登った若王子山の山頂にある。同志社の寮生たちが中心となり、創立記念日や新島永眠の日に、墓前で夜明け前に祈禱会を行うように



[写真1] 創立者墓前礼拝の様子

なったのは、おそらく1897年前後からであろうと言われており、この寮生による自発的な祈禱会が第二次世界大戦後、学校の行事として引き継がれ、現在に至っている\*。本学では新入生オリエンテーション期間中に新入生全員が参加し、創立者墓前礼拝を行ってきた「写真1」。同志社墓地で墓前礼拝を行うことで、新入生一人一人が創立者の志に思いを馳せる、本学の大切な伝統行事である。しかしながら、2020年度以降、コロナ禍により中止を余儀なくされている。

## 2 オンラインを利用した交流会の実施

2020年春、新入生オリエンテーションの中止後、遠隔授業となり、キャンパスにおける交流の機会がなくなった新入生の不安を取り除くことを目的とし、オンラインを利用した上級生との交流会を実施した。5月25日〜9月3日の期間、開催日数30日、一人暮らしや自宅生活での悩み、有意義な時間の使い方など71テーマでの交流を行った。上級生125名と新入生205名が参加しており、一定の効果は得られたように思う。しかしながら、

デジタルネイティブ世代と言われる学生たちであっても、自宅にこもる生活の中で、授業も交流も常にオンラインで行われることへの疲れや、オンラインが苦手な学生には参加しにくいなど、オンラインによる交流の限界や課題が浮き彫りになったようにも感じられた。同時に対面での交流の重要性を再認識し、秋に向けて、新しい交流企画を考えるきっかけとなった。

### 3 新たな交流企画

#### — DWCLA Pray & Hike —

2020年秋になり、大学への入構はできるようになったものの、3密(密閉・密集・密接)となる状況を回避するため、一部の講義や実験実習を除き、遠隔授業は継続され、さらに秋に実施される大学祭やスポーツフェスティバルも中止、クラブ活動もできない状況が続いた。

スポーツフェスティバルは京田辺キャンパスが開設された年(1986年)から行われている全学的な行事の一つで、スポーツを通して、学部学科、学年を超えた交流を行い、毎年約600名が参加している。

このように新入生オリエンテーションだけでなく、大学祭やスポーツフェスティバルも中止となり、さまざまな交流の機会を奪われ、リアルな友達作りに苦労する新入生に対して、2020年秋に初めて「DWCLA Pray & Hike」を企画し、実施した。この企画は本学の伝統行事である創立者墓前礼拝を新たに持続可能な形で実施する、という方針のもと、人数制限を設けた上で、参加については自由参加とした。また、アウトドア活動をしながら学生同士の交流をはかることを意識したものである。「墓前礼拝で創立者の志に触れる」「楽しいアウトドア」という内容を学生同士の会話やSNSメッセージ内で、印象的かつ手軽に伝える「伝わるタイトル」となるよう想いを込めて、DWCLA Pray (祈り) & Hike (ハイキング)と名付けた。

当日は午前と午後の2部制にし、上級生をリーダーとするグループに分かれて今出川キャンパスを出発。京都御苑、新島旧邸、鴨川河川敷、哲学の道を散策しながら若王子に向かい、山頂の同志社墓地では宗教部による墓前礼拝が行われた。その総移動距離は約8キロ。そのすべてを徒歩で行く強行軍であったが、その道のりの中でクイズに答えるという形で本学のルーツに触れながら、同級生や

# Friendship of coro



[写真2] DWCLA Pray & Hike in 2022 Springの様子 (上)新島旧邸 (下)鴨川河川敷

上級生と交流を深め、どの学生も山頂では礼拝の厳かな雰囲気の中で創立者の想いに包まれ、心地よい疲れと達成感が得られたようであった。参加者からは、『今年はずっと大学に来られず、行事もなくなって虚無感を感じていたので、今回のイベントに参加でき、素敵な思い出ができた』、『不安な毎日を過ごしていたが先輩方が優しくとても良い時間が過ごせた』などの感想が寄せられ、大変好評であった。新入生も上級生もこのPray & Hikeへの参加によって、コロナ禍で不安な気持ちと抑制された日々から少し解放されたようであった。

この行事はコロナ禍で規模を縮小しながら実施している新入生オリエンテーション期間中に引き継がれ、2021年度、2022年度は「DWCLA Pray & Hike in Spring」として実施をしている。参加者は2020年度の75名から2021年度146名、2022年度318名と年々増加している。当日のスケジュールも少しずつ見直しを行い、出発前にグループで自己紹介も兼ねた交流企画(クイズ)に参加し、市内を移動中「写真2」には、「面白いトリック写真を撮れ」や「外国を感じる写真を撮れ」などのお題に沿った写真をチームで撮っ

てもらった「写真ミッション」を行った。各グループで撮った写真は若王子神社到着時点で提出、後日、学生支援課で審査の上、グランプリチームには賞品を用意し、本学HPにも掲載した。さまざまな仕掛けを用意することで、最初は緊張していた新入生や上級生も同志社墓地に到着するころにはすっかり打ち解けている様子であった。実施後のアンケートにも、参加したほとんどの学生が「大変良かった」、「良かった」と評価し、『友達作りのきっかけになった』、『話したことがない同級生とも話せた』、『1年生と話す機会がないので良い機会となった』など、新入生同士が友人となるきっかけづくりや上級生との関わりを生むといった「縦と横のつながり」の構築に貢献していると手ごたえを感じている。2023年度の新入生オリエンテーションにおいても継続して実施する予定である。今後さらに、行程や企画の見直しなどを行い、新入生がより参加しやすい行事へと育てていきたいと考えている。

### おわりに

本学では新入生オリエンテーションリーダー以外に、本



学ならではの制度として、1957年より続く「ビッグシスター・リトルシスター制度」がある。これは、初めて体験することが多い大学生生活の新しい環境に、少しでも早く慣れ親しめるよう、入学前の新入生（リトルシスター）に上級生（ビッグシスター）を紹介する制度である。心強い相談相手・良き友人として、先輩・後輩を超えた信頼関係を築けることが大きな魅力となっている。いずれも希望者が自ら応募するものであるが、リトルシスターは2020年度217名、2021年度486名、2022年度630名、ビッグシスターは2020年度195名、2021年度267名、2022年度340名と年々増加している。特にリトルシスターの希望者はこの3年間で3倍に増加したことから、コロナ禍以降、新入生の大学生活への不安の大きさを示し、上級生との「縦のつながり」がその解消に役立つている。

また、2022年10月末には従来の球技などに加えて、eスポーツも取り入れたスポーツフェスティバルを3年ぶりに開催し、約600名が学部学科、学年を超えて交流を深めた。

コロナ禍前から新入生の不安な事柄の上位には友達作り

が挙げられてきた。コロナ禍でさまざまな交流機会を奪われ、制約を受ける日々の中で、その不安感はますます大きくなっている。現在、本学も少しずつコロナ禍前の日常を取り戻しつつあるが、そのような中にあっても、人間関係をうまく構築できない学生の孤立を防ぐため、「DWCLA Pray & Hike」のような新たな交流企画を含むさまざまな交流の機会を作っていく必要性を感じている。もちろんこれらはきっかけにすぎないが、その中から、学生たちが自分にあった方法を選び、やがて自分自身で次へのステップへ進んでいけるよう、これからも学生たちからの意見も聞きながら、支援を続けていきたいと考えている。

※ 学校法人 同志社 法人事務室発行 『同志社墓地のご案内』  
[http://www.doshisha.ed.jp/pdf/doshisha\\_cemetery.pdf](http://www.doshisha.ed.jp/pdf/doshisha_cemetery.pdf)

## 入学前の友だちづくりサポート

### —TOGAKU Meet & Greet (トীগアクミーグリ)—

渡邊 紳也

東洋学園大学

入試広報センター入試室課長補佐・  
ましましプロジェクトリーダー

#### 1 入学前サポートプログラム企画の背景

「最初の友だちができたのは入学から半年後でした」

入学前サポートプログラムの立ち上げに先んじて在学生へのアンケートを行った際、ある学生がこう答えた。2020年度に入学したこの学生の世代は新型コロナウイルス感染拡大の影響を受け入学式が行えず、授業もオンラインでスタートという状況であった。

確かに授業についてはオンラインで実施できる体制が整えられたが、こと大学生活という意味では入学直後から

緊急事態宣言が発令され、オンライン授業のためほぼ通学もできず、部活もサークルもアルバイトもできず悶々とした日々を過ごしていた学生も多かったと分かった。

一部の授業が対面で行われることになったのは秋学期(9月)で、その際によく友だちができたというのが冒頭の学生の言葉である。

大学進学というライフステージの変化にあたり、さまざまな不安を抱えている者も少なくない。在学生へのアンケートで入学前に不安に思っていたことは何か、という質問に対し「友だちづくり」と回答した学生が多く、特にオンライン授業が増えているコロナ禍においては同じクラスであっても対面で接する機会が少なく人間関係に不安を抱えているということであった。

コロナ禍以前でも入学直後から授業に欠席がちとなってしまう学生は存在しており、場合によってはそのまま退学してしまうケースもあった。もちろんこのようなケースは交友関係のみが原因ではないが、早期から同級生や先輩学生とコミュニケーションがとれて、大学へ通う動機が見つかれば、中には違う結果になった学生もいたかもしれない。輪をかけてこのコロナ禍である。通常時に比べ不安を

抱く学生が増えることは容易に想像できた。

こうした状況を踏まえ、数ある大学の中で本学を選んだ学生に充実した学生生活を送ってほしいという思いから入学前サポートプログラムの構想が始まった。

## 2 サポートプログラム実施事例

2021年6月に、2022年4月の入学生へ向けたサポートプログラムを検討するため「ましましプロジェクト」を立ち上げた。この名称は友だちを「増やし」、大学への興味が「増す」ようにという思いを、特定種のラーメンのトッピングを増やすことを俗に「マシマシ」と言うことになぞらえてつけられた。

プロジェクトでは、入学前に抱える人間関係への不安解消をサポートするためには大学から一方向なコンテンツ提供を行うのではなく、参加者が同級生や先輩学生と交流を図ることができ、シームレスに入学へとつなげられるイベントが必要だと考えた。

サポートプログラムで行う一連のイベントを「トীগクミーグリ(TOGAKU Meet & Greet)」と名付け、総合

型選抜や学校推薦型選抜といったいわゆる年内入試での入学が決定し始めた12月下旬より翌年3月末まで継続的にオンラインと対面で実施することとした。

### (1) オンラインイベント

オンラインイベントを実施するにあたり、本学が使用したシステムはO.V.I.C.E株式会社<sup>※1</sup>が提供するバーチャル空間である。Webブラウザ上で動作するもので、パソコン・タブレット・スマートフォンいずれの端末からでもアクセスが可能となっている。

空間は2D(平面)で表示され、フィールド上に表示される自身の分身となるアバターを操作し、会話をしたり動画やWebコンテンツ等を見たりすることができる「写真1」。

検討段階では3D空間のシステムも案があがったが、参加者の多くがスマートフォンを使用することが予想されることから、端末への負荷や通信量が少ない2Dを利用することとした。没入感やエンターテイメント性で劣る一方でスマートフォンを所持していれば場所を選ばず参加できることや操作が容易であることが大きな利点である。実際、参加者へのアンケートでは8割以上がスマートフォンから

# na generation

の参加であり、操作が難しいと答えた者は少なかった。

ログイン画面でニックネームを入力すれば自身の分身となる「アバター」が生成されバーチャル空間に登場する。操作は移動したい場所をダブルタップ（パソコンの場合はダブルクリック）するとアバターが移動するシンプルなもの、他の人が操作するアバターと一定距離に近づくと会話ができる仕組みになっている。

オンラインイベントは毎週水曜16時に開催される「トীগクアワー」とスポットで行うイベントを合わせて計14回実施した「表1」。



[写真1]オンラインイベントの様子

毎回異なるテーマを設定し、先輩学生や教職員によるトークライブ、ネイティブスピーカーの教員との英語交流、参加者同士が協力するクイズ大会、運営スタッフがカメラ片手にキャンパス内を回り部活やサークルの活動状況をライブ配信する等、バラエティに富んだイベントを実施した。そして毎回のメインコンテンツ終了後、質問受付やフリートークタイムを設け、参加者が交流できるような形とした。

バーチャル空間でのイベントは、参加者が画面に一覧表示されるのみの一般的なオンライン会議システムに比べ、アバターが縦横無尽に動き回り、そこかしこで会話やチャットで交流しており、参加者が同じ場所で過ごしている空気が生まれたように思う。参加者からは「入学前に先輩学生や同級生と直接コミュニケーションが取れたりクラブ・サークル活動を見ることができたりしてうれしかった」という声が寄せられた。

イベントでの交流をきっかけに一緒に入学式に出席した参加者もあり、友だちづくりの一端を担えたのではないかと考える。

## Friendship of coro

No.	実施日	イベントタイトル	ゲストスピーカー
1	2021年12月23日	オープニングイベント～教えて先輩編①～	先輩在学生 3名
2	2022年1月12日	大学での友だちづくりについて	人間科学部 准教授
3	2022年1月19日	大学のオンライン授業&パソコン事情①	メディアセンター職員
4	2022年1月22日	謎解きイベント作戦会議	—
5	2022年1月26日	なんでも質問タイム	先輩在学生 3名
6	2022年2月2日	活動中に突撃訪問!クラブ・サークル紹介	学生支援課職員・学生団体
7	2022年2月9日	入学予定者講習について聞いてみよう	教養教育センター職員
8	2022年2月15日	英語交流イベント (バーチャルイングリッシュラウンジ)	英語教育開発センター教員 4名
9	2022年2月26日	教えて先輩編②	先輩在学生 3名
10	2022年3月2日	大学のオンライン授業&パソコン事情②	メディアセンター職員
11	2022年3月9日	スペシャルイベント チームで協力! オンラインクイズ大会	—
12	2022年3月16日	大学の図書館を利用しよう	図書館職員
13	2022年3月23日	資格取得とキャリアについて	資格・キャリアステーション職員
14	2022年3月30日	これまでの振り返り&なんでも質問タイム	—

[表1]オンラインイベント実施一覧

## (2)対面イベント

対面のイベントはキャンパス全域を使った「謎解き」を実施することとした。「消えた不死鳥と幻の七不思議」というタイトルで、コンテンツ開発はプロの謎解きクリエイターの協力も得て本格的な仕上がりとなった。

5名程度を1グループとして、キャンパス各所に隠された謎を解き、盗まれてしまったフェニックス・モザイク<sup>※2</sup>の原画を取り戻すという架空のストーリーである。

各グループには先輩学生をファシリテーターとして配置し、キャンパス内で迷ってしまった際や謎解きに行き詰ってしまった際にそれとなくヒントを出すことにし、参加中のトラブル回避に努めることとした。運営側では演劇サークルをはじめダンス部や軽音楽部といった学生団体が出演し、ストーリー進行や謎解きに必要な役割を担ってもらうこととした。また、謎を解くために訪れる場所はパソコン自習室や学食、体育館等入学後に利用することになる施設を多く設定した。

このような形のイベントとしたのは、参加者総数が多い場合でも、少人数グループでオープンスペースの多いキャンパス全域を移動することで感染症対策がとれること、ま

た、謎を解く中で同級生や先輩学生との交流ができ、キャンパス施設への理解も深めることができるためである。

イベントは2022年2月に実施すべく準備を進めていたが、残念ながら直前に東京の行動制限が発令され、実施を延期

することとなってしまった。そのため、入学後の2022年9月に在学生全体向けのイベントとして改めて開催した「写真2」。入学後ではあったが、中には初対面の学生が同じグループになることもあり、イベント後にSNSのアカウント交換を行う等、交友関係が構築されていたようだった。参加者からは謎を解く上で自然と会話が生まれることや謎解きそのものが楽しかった等の意見が寄せられた。



【写真2】謎解きイベントの様子

### 3 今後の取り組み

2023年4月入学予定者に向けては、本稿にて紹介したオンライン・対面のイベントの実施に加え、コミュニケーションアプリ「LINE」を用いたサポートを活性化する予定である。

昨年度のイベントの中では授業のことやカリキュラム等教学面に関する質問に比べ、わざわざ電話やメールしてまで聞くほどではない細かな疑問や不安が多く寄せられた。例えば「通学する服はたくさん必要?」「クラブ・サークルは入ったほうがいい?」「パソコンは何を買えばよいか?」「友だちはいつ、どんなタイミングでできる?」等、一つ一つは小さなことだが、入学予定者にとっては大きな関心事のようだった。今後はイベント参加者をさらに増やしていくことも課題の一つにあるが、イベントに参加しない者であっても、このようなふとした不安や疑問をいつでも質問できるようにLINEを使用したワンストップサービスを展開し、多様なニーズに答えたいと考えている。

おわりに

本プログラムはコロナ禍の支援として構想が始まったものだが、イベント参加者や在学生の声を聞くうちに、そもそも新しい生活を迎えるにあたって生じる不安はコロナ禍でなくとも存在し、そのサポートは現在の状況が変わっても継続するべきだと感じた。

本学が掲げる理念の一つに「面倒見のよい大学」というものがあるが、このプログラムを通して「入学前から面倒見のよい大学」と思ってもらえるよう、今後も本プログラムの充実を図っていきたい。

※1 oVice株式会社 <https://ovice.in/ja/>

※2 フェニックス・モザイク 本学1号館西壁にある陶片壁画。作品のデザインと制作指導を建築家の今井兼次氏が担当し、1961（昭和36）年に旧東洋女子短期大学開学10周年を祝し、学園のシンボルとして完成した。タイトルは「岩間がくれの董花」。校舎建て替えの際に解体された他4作品と合わせてフェニックス・モザイクと総称される「写真3」。



[写真3]フェニックス・モザイク

## 共通教育での学修を通した 友だちづくり

高野 嘉寿彦

信州大学学術研究院総合人間科学系教授・  
同学系長・全学教育機構長

### はじめに

信州大学(学部入学定員1978人)は、松本キャンパスに人文学部、経法学部、理学部および医学部、長野教育キャンパスに教育学部、長野工学キャンパスに工学部、伊那キャンパスに農学部、上田キャンパスに繊維学部の8学部を有し、長野県内5つのキャンパスからなる地域分散型の総合大学である。全国(世界)から学生が集まり、約75%が長野県外出身である。教養部時代より学部に入學した1年生は1年間、松本キャンパスで共通教育(本学では教養教育を「共通教育」と呼んでいる)を受けた後、2年生から各学部(各地)に進級していく。サークル活動等を通

してキャンパスをまたいだ学生間の交流はあるが、多くの学部生は他学部生との交流が少ないまま進級している。このため、以前より「信大生としてのアイデンティティの醸成」が課題になっている。

### 1 共通教育カリキュラム

2006年4月に全学協力体制のもと、共通教育を責任をもって実施する組織として「全学教育機構」が設置された。これまでに2011年度、2015年度および2020年度からの共通教育カリキュラムを定期的に見直してきた。先に述べた「信大生としてのアイデンティティの醸成」のため、2015年度からのカリキュラムにおいて、一部学部を除いて教養科目の演習科目(以下、「教養ゼミ」と呼ぶ)を必修化した。さらに推し進めて、2020年度からの共通教育カリキュラムでは、「主体的・能動的学び」を柱として「基盤系」「教養系」「専門基礎系」の3つの系で構成した。「基盤系」は学問形成に不可欠な基礎・基本的な知識の習得・能力開発を目的とし、「学術リテラシー」「健康」「言語(1年次)」「統計」「科学史」「現



代社会論」の6科目、「教養系」は、社会人として必要な幅広い教養の習得、問題解決力・探求力の開発を目的に、「人文・社会(11科目)」「自然・技術(7科目)」「環境・健康(7科目)」の3区分25科目、「専門基礎系」は学部専門につながるための知識や能力の習得を目的に「言語(2年次)」「基礎科学」を設けている。

## 2 学術リテラシーにおける交流

文部科学省が進めている「高大接続改革」における大学教育改革では「学力の3要素の伸長」が求められている。これを念頭におき2020年度からの共通教育カリキュラムでは初年次教育(高大接続教育)の位置付けで「学術リテラシー」を設けた。学術リテラシーは教室での対面授業(1単位、8回、1クラス50名弱)で前期に隔週で実施している(本学は前期および後期の2学期制)。毎回のグループ活動により多種多様な専門知識や考え方が異なる学生同士が協働して課題に取り組む。グループ活動を通して「楽しく」(事前および事後学習は多い授業)学習することで、「信大生としてのアイデンティティの醸成」につながり、学

部や学科等の枠を越えた「学修」を通じた交流ができる。

初年次教育の専門家以外の教員が担当できるようにハンドブックを作成、前半(1週から4週)では「読み中心」として第4回目は新聞を用いて自身が選択した記事について記事内容の時間的変化や自身の意見を2分間のプレゼン資料としてまとめてグループ内で発表する。また、後半(5週から8週)では「書き中心」で第8回目は指定課題図書の評価を2分間の発表原稿にまとめてグループ内で発表する。各回のグループ活動を通じた成果物に対してコメントして、コメントを受けての修正版に対するグループ内での相互評価(成績評価の4割に加味される)や自己評価を行う形式で高等学校までの学習を振り返り(確認)ながら進める「スタディスキル」に重点を置いた必修科目である。

共通教育の全ての科目において「授業アンケート」を実施しているが、学術リテラシーは授業アンケートに加えて独自のアンケートを本学のシステムを用いて実施している。質問項目は「入学前や学術リテラシー受講前の学び」(8項目)と「学術リテラシーの内容や受講後の変化」(12項目)である。2020年度の回答率は69・6%で「オンラインでのコミュニケーションに苦労した」という回

# na generation

答が多く、成長したことは「文章を書くこと」に焦点をあてた回答が多くみられた。経験のない新型コロナウイルス感染症のため余儀なくオンライン授業になり、多くの学生が他者とのコミュニケーションの取り方に苦労したようだ。2021年度の回答率は81・1%で、対面での実施ということもあり、文章を書くことやコミュニケーションに関して成長したと回答した学生が多くみられた。今年度の回答率は51・9%と低くなったが、苦労や成長したことにについては昨年度と大きな差はなかった。

学術リテラシーのアンケートの質問項目の一つに「学術リテラシーの受講前は、学習中の他者とのコミュニケーションについてどのように思っていましたか?」がある。「自分から積極的に関わりたい」から「できる限り関わりたい」まで5段階で回答する。各年度(2020～2022年度)「自分から積極的に関わりたい」と「どちらかと言えば関わりたい」を加えた割合は約65%であった。学術リテラシーを通して多くの学生が学部や学科等に関係なく交流しているものと考えられる。これは初回授業やグループ替え後にグループメンバー同士がLINE交換していることからもうかがえる。逆に「どちらかと言えば関わらない」と「で

きる限り関わらない」を加えた割合は各年度約15%であり、他者との関わりに消極的な学生が一定数いる。

### 3 教養ゼミにおける交流

本学の教養系の科目には講義(標準受講生数100名)と教養ゼミ(25～30名)がある。学術リテラシーは50名弱でスタディスキルを中心に実施、さらに少人数でアカデミックスキルの割合が高い教養ゼミを2020年度より1年生に課している。受講生は特定の学部や学科等に偏らないように原則抽選により決定している。

各学期の教養ゼミ担当教員および受講生を対象に実施状況調査(教員対象9項目、学生対象5項目)を実施している。2022年度前期の本题に関する設問項目について述べる。教養ゼミは53科目開講、受講者数1363名、回答率65・0%であった。受講生対象の調査の設問は、「①グループワークの実施とその頻度」「②フィールドワークの実施とその頻度」「③レポートのフィードバックとその頻度」「④コミュニケーション力が身についたか」「⑤論理構成力が身についたか」の5項目である。①の回答では、5回未満および実施な

# Friendship of coro

しの割合が約35%、15回全て実施が23%であり、多くの教養ゼミでグループワークを実施していることがうかがえる。設問④は「強くそう思う」から「全くそう思わない」までの5段階回答で、「強くそう思う」「そう思う」を合わせると72%になり、他者との協働の中でコミュニケーション力が身についたようだ。このことから教養ゼミを通して学生間の積極的な交流があったことがうかがえる。

## 4 入学前教育における交流

本学では専門性に応じた課題等を学部ごとに課している。また、全学教育機構では学校推薦型選抜合格者が多い工学部を対象に入学前教育を行っている。参加は任意である。この入学前教育は、個別ワーク(大学eラーニング協議会が提供している教材を使用)が5コースとグループワークの2つから構成されている。グループワーク(1グループ3~4名)では他の合格者と一緒に数学や統計等の3つの課題に挑戦する。これにより、他の合格者との交流や共通教育を担当する教員との交流ができる。

入学前教育アンケートの設問項目「入学前教育に参加

してよかった」および「来年度の入学生に入学前教育への参加を勧めたい」(5段階回答)では、「そう思う」および「どちらかと言えば、そう思う」と回答した割合が80%を超えており、入学前教育の内容や活動に好印象だった学生が多く、他者と「楽しく」グループ活動できたものと思われる。

## おわりに

全ての学部学生が交流できる共通教育では、学術リテラシーや教養ゼミでのグループ活動の他、講義においても他者との交流の機会を与えている授業が多くある。「友だちをつくる」に特化した取り組みではないが、共通教育で他者と積極的に関わってもらいたいと思う。今後もウイズコロナを念頭に「密」な授業を展開し、対人関係の構築を支援していきたい。



全学教育機構から望む松本キャンパスと北アルプス

# 現在の出来事の背後の歴史

小森 陽一

学校法人和光学園理事長

現在の仕事に就くことが決まる頃、ロシアのプーチン政権は、国際法違反のウクライナへの軍事侵攻を始めた。この文章を書き始める頃、プーチン政権は、東部のルハンスク州やドネツク州などを、住民投票賛成多数の結果と称して、ロシアに併合した。

ロシアによるウクライナ侵攻の現地からの映像がテレビニュースで放映される度に、日本語のナレーションが入るまでの数秒間、ロシア語やウクライナ語が聞こえてくる。

そのとき、自分の意志にかかわらず、子どもの頃の記憶が蘇ってくるようになる。

チェコスロヴァキア(当時)の首都プラハにあった、世界労働組合連盟の本部に勤務することになった父親の仕事の都合で、私は小学校2年生の1961年から足掛け5年間、在プラハソヴィエト大使館附属(8年制)普通学校に通うことになった。この学校の詳細については、私たちが行く1年前からプラハに住んでいた米原万里さんの

『オリガ・モリソヴナの反語法』をお読みいただきたい。

郊外の自宅から学校に通う市電の車窓からは、父親の職場の近くにあるレトナ広場にそびえる巨大なスターリン像を見上げていた。1961年10月のソ連共産党第22回党大会で、スターリンの遺体をレーニン廟から除く決定が採択されたことを校長先生から全校演説で聞いて、子どもながらに驚いた数日後、スターリン像は爆破されて、瓦礫の山となっていた。

当時のフルシチョフ首相によるスターリン批判は、1956年のソ連共産党第20回大会から行われていたということがわかったのは、かなり後になってからであった。このスターリン批判をめぐるのは、「中ソ対立」と後に歴史化される理論的対立が、核兵器開発をめぐる国家対立になっていた。

米原万里さんから当時教えられていたこととであったが、それまで在プラハソヴィエト

大使館附属普通学校には、中華人民共和国のプラハ駐在員の子どもたちも通っていたのだが、一斉にいなくなったということであつた。

アジア系の生徒は、私たち日本人とモンゴル人しかいなかった。朝鮮民主主義人民共和国の子弟も、中華人民共和国の子弟と行動を共にしたとも聞いた。

複雑な共産党間の路線対立について十分理解していたわけではなかったが、2つのアジアの社会主義国の大使館からは何度も招待を受けた。

私と5歳下の妹にとっては、両大使館からの招待は何よりの楽しみだった。妹は自宅近くのチェコの幼稚園に通っていたのだが、チェコ料理もロシア料理もジャガイモ中心の脂っこくて大味であり、2人ともうんざりしていたのである。

それに対して両大使館の料理では、炊かれた白米で懐かしい味噌や醤油の味を楽し

むことができたのである。食事が終わると大人たちは難しい政治の話をしていただろうが、私たち兄妹は、大使館の映画室で、子ども向けアニメーション映画を好きだけ視聴できた。

両大使館は、ソヴィエト大使館もあるレトナ広場の近くの高級住宅街にあつた。レトナとは、「夏」という意味のチェコ語で、対ドイツ戦勝利をはじめとする様々な記念日のソ連・チェコ両軍の軍事パレードがこの広場で行われていた。

この1961年まで、州都ドネツクはスターリノと呼ばれていた。個人崇拜を禁止していたレーニンが死んでからの名称であり、それまではユーゾフカという都市名であつた。ルハンスクは、同じ時代ヴォロシロフグラードと呼ばれていた。ヴォロシロフは、スターリンの盟友である。現在の出来事の歴史的背景が鋭く問われる日々を私たちは生きている。

# コロナ禍に対応した ホームカミングデー

卒業生は大学にとって心強い後援基盤であり、寄付を含めた学生支援や社会貢献活動の仲介など、大学の持続的な発展のためには欠かすことができない存在である。18歳人口の減少や大学全入時代の到来など、高等教育を取り巻く環境が厳しさを増す今、卒業生との関係強化や、若年層の卒業生との関係構築に力を入れる大学も増えている。

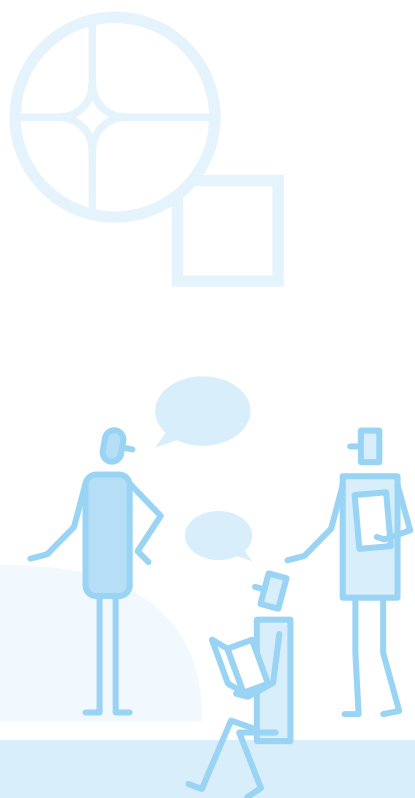
卒業生の帰属意識を醸成し、大学との関係を強化する機会のひとつとして、各大学はホームカミングデーを開催してきた。著名な卒業生による講演会などのエンターテインメント性の高い企画、キャンパスツアーや展示会といった大学の歴史を振り返りつつ今を紹介する企画をはじめ



とするオリジナリティ溢れるイベントを実施し、卒業生の「同窓会」を盛り上げている。

しかし、新型コロナウイルス感染症の流行により、従来のホームカミングデーの開催方法やコンテンツは大きく見直されることとなった。それに伴い、多世代にわたる卒業生と大学の関係構築の方法も、少しずつ変化している。そのあり方は各大学さまざまであるが、運営方法や活性化に悩む大学がある一方、コロナ禍の経験を駆使してより多様な展開を見せる大学もある。

ホームカミングデーの活性化に向け、大学は何をすべきか。各大学の多岐にわたる取り組みを通じてその開催目的を再定義し、卒業生との関係強化策やコロナ禍で難しくなりつつある運営ノウハウの継承など、多角的な視点からホームカミングデー活性化に向けたヒントを提供する機会としたい。



## CONTENTS

### ホームカミングデーオンライン開催

―母校とつながる駒澤のこころ―

日幡 亮一 駒澤大学教育振興部

多様な交流ができる同窓会組織であるために。

「楽しい」演出とエネルギーの創出を。

―TACHIBANA THANKS DAYに込めた想い―

蘆田 一毅 京都橘大学総務部総務課長

石原 雅子 京都橘大学企画部広報課長

### 卒業生との関係強化の

起爆剤としての事例紹介

上坂 孝博 学校法人桜美林学園

事業開発部長

ホームカミングがもたらす豊かな時間とは

―母校はなにゆえ「マザー」であるのか―

中里 則之 立教大学総長室次長兼

渉外課長

## ホームカミングデー

### オンライン開催

―母校とつながる駒澤のこころ―

日幡 亮二

駒澤大学教育振興部

#### はじめに

駒澤大学のホームカミングデーは大学と同窓会との共催により実施されている。これは「ホームカミング」の名のとおり年に1度、母校である駒沢キャンパスを会場として同窓生を迎え、著名同窓生による講演会や名物教授による懐かししの授業などを実施するもの。開催年によっては学生主体のオータムフェスティバル（いわゆる大学祭）と同日開催し、学生時代の青春よろしく現役学生サークルの発表会や模擬店などを楽しんでいた。卒業後5年、10年、20年、30年、40年以上の同窓生をメインゲストとして招待し、例年

800名を超える方々の来場があった。近年は時代の流れとともに若手同窓生の参加誘引をテーマとし、お子さま連れ、ファミリーでも楽しめる企画の考案、例えば「フワフワバルーン」の設置やワークショップの実施など工夫を凝らして開催内容を検討してきた。こうして2004年の第1回から2019年の第16回まで回を重ねてきた。

#### 1 新型コロナウイルス感染症の猛威

「第17回ホームカミングデー」を開催していたであろう2020年度、新型コロナウイルス感染症の感染拡大を受けて大学は混乱していた。学生はキャンパスに入構できなくなり、授業はかつて経験したことのない「オンライン」化。

5月、例年であれば当該年度のホームカミングデー実施に向けた委員会を開催する時期だったが、外出もままならない当時に対面での会議などはもつての外と、委員会開催がかなわず、「第17回ホームカミングデー」は中止を余儀なくされた。中止の決定に対して残念がる同窓生の声もほんの一部で、それ以上に未知のウイルスの脅威が上回り、開催中止やむなしと受け入れられた。



## 2 ホームカミングデーの新たなかたち

本学では中止となったホームカミングデーだったが、この間も他大学においては新しいかたちでのホームカミングデー開催がなされていた。その主たるものがオンライン開催であった。あらかじめ録画・収録・編集した動画を配信したり、リアルタイムで講演会などのLIVE配信を行ったり、Web会議システムを使用して交流会を実施したりと内容はさまざまだが、ホームカミングデー自体の開催を途絶えさせずに、同窓生にとっての「母校とつながる」行事を継続させる姿勢は素晴らしく感じた。それと同時に、トンネルの先が全く見えなかったコロナ禍情勢を鑑みるに、本学でもこの手法を取り入れることになるであろうことは考えるに易かった。

## 3 迎えた2021年度

新型コロナウイルス感染症の情勢は変わらず、本学も一部の小規模授業では対面とオンラインを併用したハイブリッド授業が展開されるようになったが、キャンパス内の閑散とし

た様子は続いていた。2021年5月、また当該年度のホームカミングデー実施に関して考え始める時期が到来した。冒頭、ホームカミングデーは大学と同窓会の共催であると述べたが、実質は大学側では総務部広報課、同窓会側では教育振興部という部署が事務局を担う。双方で検討を重ねた結果、まず2年続けて「何もしない」という選択肢はないという統一見解がもたらされ、そして前年の他大学の取り組みを鑑み、オンラインイベントの専門業者によるプレゼンの機会を設け、本学もオンライン開催にかじを切り始めた。

## 4 オンラインコンテンツの創出

オンライン開催の決定に基づき、続いては本学がどのようなコンテンツを提供・発信できるのか、企画案の創出が始まる。真っ先に考えたのは、「通常開催のときに実施していたプログラム」の再現である。「開会式&オープニングアトラクション」「著名同窓生の講演会」「懐かしの授業」など。これらは撮影・収録を行い配信ができるため、オンデマンドコンテンツにはなるが企画としては着手しやすいものだった。ただし「開幕」の一体感を持たせるため、「開会式」

をはじめ各コンテンツの配信開始時刻は定刻に設定することとした。実際に企画したコンテンツは次のとおりである。

- ①開会式
- ②駒大演芸広場
- ③スペシャル対談
- ④ホームカミングデー特別授業
- ⑤サークルフェスティバル
- ⑥映像で振り返る駒澤大学
- ⑦同窓会全国支部広場
- ⑧オンライン交流会
- ⑨全日本大学駅伝大応援会



[画像] 開催案内チラシ

## 5 リアルタイム企画の必要性

前述のとおり「第18回ホームカミングデー」のほとんど

が、事前収録のオンデマンドコンテンツ視聴型のプログラムであった。日程・時間を指定して企画は実施するもの、ご参加いただく同窓生の皆さまと時間軸における共有・共感が得られないのではという懸念から、同じ時を共有できるコンテンツの必要性が浮上した。他大学の事例ではオンライン(参加型配信)で「大学にまつわるクイズ大会」を実施したり、LIVEでの「講演会」や「表彰式」などを行ったりするケースを目にした。われわれが考案した企画案は、ほとんどが作り込みを優先するためにも事前収録が望ましかった。一方でLIVEである必要性が乏しい。オンラインで実施するコンテンツに「オンライン交流会」があったが、これはあくまで申し込み制で参加された方同士のみが交流するプログラムのため、LIVE感を演出する内容ではない。そこで、われわれはホームカミングデーの開催日程に着目した。

## 6 駒澤が一つになるコンテンツ

「第18回ホームカミングデー」の開催日は2021年11月6日(土)・7日(日)であったが、2日目の7日には本学の関

係者や同窓生、駒大ファンにとって秋のビッグイベントである「全日本大学駅伝対校選手権大会（以下、全日本大学駅伝）」が控えていた。日程がホームカミングデーと重なったわけである。この一大イベントとコラボレートしない手はないと考えだしたが、「全日本大学駅伝大応援会」であった。

駒澤大学同窓会には派遣講師という制度がある。著名な同窓生を同窓会地域各支部などからの要請に応じて派遣し、派遣講師は講演や落語などの演芸、演奏などを披露して場に花を添える。この派遣講師の中に「ものまねアスリート芸人」として活躍し、本学陸上競技部の出身でもあるM高史氏がいた。彼ならば駒大のマニアックな知識はもちろん、陸上競技のWeb記者としての経験からさまざまな情報を有しており、キャスティングには最適だった。では彼をもってして何をするか……。打ち合わせの末に出た結論が「YouTube LIVEによる駒大独自の全日本大学駅伝実況中継配信」であった。

2021年の駅伝は新型コロナウイルス感染症の影響で現地応援が禁じられていた。ならば同窓生やファンの皆さまはテレビ中継で応援する。その観戦のお供に、パソコンやスマートフォンを通して駒大のオリジナル実況解説が聴け

るという企画である。さらに企画を盛り上げるためにさまざまな団体に所属する現役の学生にもゲストとして登場してもらおうこととなった。まずは本学の学生スポーツ新聞「駒大スポーツ（コマスポ）」を手掛けるメンバーである。彼らにはM高史氏との掛け合いと日頃の陸上競技部取材で得た知識を披露し、中継に厚みを増してもらおうことを期待した。次に、本来であれば現地で出場選手たちに全力のエールを送るはずだった「おうえん応援指導部ブルーペガサス」チアリーダー部のメンバーである。彼女たちには現地に行けず悔しい思いをした同部のメンバーの分まで、実況を通してエールを届けてもらうべく参加してもらった。以上、メインMCにM高史氏、ゲストにコマスポ編集部、応援指導部ブルーペガサスを迎え、企画は行われることになった。



[写真1] 全日本大学駅伝大応援会配信メンバー

## 7 「第18回ホームカミングデー」開幕

2021年11月6日(土)、本学にとって初めての試みとなったオンラインによる「第18回ホームカミングデー」が開会を迎えた。14時、同窓会派遣講師で津軽三味線ユニットの「輝&輝」による軽快な三味線の音色が開幕を告げると、駒澤大学・各務洋子学長、駒澤大学同窓会・大石孝会長によるあいさつがなされ、その後、本学卒業生でフリーアナウンサーの高田英子氏による司会進行の下、順次各コンテンツを配信した。「駒大演芸広場」では、同窓会派遣講師の落語家・桂竹丸氏による落語と、江戸太神楽師の花仙氏による名人芸を配信。「特別授業」では、仏教学部・村松哲文教授による「仏教美術の楽しみ方」をテーマとした講義を、本学の施設である禅文化歴史博物館を舞台にお届け。事前収録の各種コンテンツは順調に配信された。

## 8 全日本大学駅伝大応援会

2日目、いよいよ全日本大学駅伝当日。配信用スタジオは準備万端。全日本大学駅伝は距離が8区間106.8km

と長く、スタート時間も朝8時と早いため、出演者や配信クルー、事務局も早朝からスタンバイした。そして、テレビ放映開始に合わせて「全日本大学駅伝大応援会」LIVE配信がスタートした。

「現状打破！」実況・解説のM高史氏お決まりの一言から開会。レースに注目しながらも、ゲストのコマスポ編集部メンバーとの掛け合いが軽快である。M高史氏は自身もランナーで、陸上関連の取材を数多くこなしているだけあって知識量がすごい。走り方、シューズの特徴、

ランナーの心情など、多種多様なコメントや解説は期待以上のもの。称賛と感心の声がYouTubeのチャット画面にも表れる。続いては応援指導部のチアリーダーを迎え、メールとともに実況をお届け。レースの展開も上々で



[写真2] LIVE配信スタジオの様子

1区走者は見事、区間賞を記録。トップで襷たすきをつないだ。

目まぐるしく展開するレースと同じく、M高史氏の解説もとどまることなく続いていく。陸上競技部卒業生だからこそ知る最新の駒大選手情報を織り交ぜながら、それでいてテレビ中継から流れるタイム差なども漏らさずに配信に乗せていく、見事なさばきぶりであった。彼がいてこそ、本学ならではのオンライン企画を届けることができた。肝心のレースはさらに盛り上がる展開となり、最後は見事トップでフィニッシュ。

LIVE配信ブースも最高潮の盛り上がりと歓喜の中、「全日本大学駅伝大応援会」は大成功で幕を閉じた。視聴回数は、配信時間内に1万1千回を超え、駒大ファン、駅伝ファンの熱狂ぶりをあらためて感じる結果となった。



[写真3]ゴールに沸く出演者たち

## 9 襷たすきがつないだ母校愛

新型コロナウイルス感染症の影響は、ホームカミングデーのみならず全国各地の支部同窓会開催の機会をも奪い、母校に集う機会を逸してしまった。そのような環境下で、初挑戦となった「オンライン」企画。本学には絆を一つに結ぶものがあつた。オンラインだからこそ、全国どこでも、海外からでもつながることができた。同じ配信を観て、聴いて、母校の背中を押し、最後に同じ感動を分かち合うことができた。お互いの顔は見えないが、間違いなく気持ちが一つにつながった時間だった。

「駒澤大学」といえば「スポーツ」という印象は今でも多く聞かれる。勝ち負けがあり、応援する人がいるという概念が成立している「スポーツ」があつたからこそ、一つのコンテンツを生み出すことができた。あの日あの時の感動と一体感を忘れることなく、これからも母校がつながる瞬間を演出していきたいと思う。

多様な交流ができる同窓会  
組織であるために。「楽しい」  
演出とエネルギーの創出を。

—TACHIBANA

THANKSDAYに込めた想い—

蘆田 一毅

京都橘大学総務部総務課長

石原 雅子

京都橘大学企画部広報課長

## 1 京都橘大学淳芳会について

京都橘大学 淳芳会じゅんぽうかいは、全卒業生が加入する同窓会組織であり、1期生が卒業した1971年に設立。現在の会員数は2万4千名を超える。会員相互の親睦をはかり、また京都橘大学の教育・研究活動を支援することを目的としている。

淳芳会では、毎年秋に開催するホームカミングデーをは

じめ、さまざまな企画を運営している。また、在学時代から淳芳会への参画意識を高められるように、年に1度の総会・懇親会は現役学生にも開放している。その他、機関誌の定期発行など、母校の成長に期待し、応援してもらえるよう広報活動を行っている。

一方で、本学は女子大学からスタートしたこともあり、淳芳会企画への参加者は40代以上の女性が大半である。そのため、実施するイベントや企画内容も子育て世代を対象とした傾向が強い。今後さらに、卒業生ネットワークの礎を強固にしていくためには、①共学化（2005年度）以降の男性卒業生の参加率をあげること、②新たな参加層の開拓、③20〜30代と40代以上の相互交流を生み出していくことなどが必要である。

## 2 コロナ禍で分断されたつながり

本学は、さまざまな分野を学ぶ学生たちがひとつのキャンパスに集い、日常的に交流することで多様な価値観や考え方にふれて人間として成長していくことを重視している。大学生活を振り返ったときに、多くの友人たちと

共に学び、切磋琢磨して取り組んできたキャンパスでの想い出があるからこそ、卒業後も大学とつながっていたいと思えることもあるだろう。

また、教育・研究の推進と共に、地域コミュニティの活性化も大学の果たすべき重要な役割と捉えている。2022年に学園創立120周年を迎えた本学は、常に地域社会に支えられて、これまでの歴史を歩むことができた。学生が学び成長していく環境は、大学の中だけではなく、地域や自治体の支援があつてこそ充実したものとなる。

しかしながら、新型コロナウイルス感染症の発生により、当たり前にあつた学生生活や地域イベントは、「人との接触を避ける」ということから、あらゆる交流の機会を失つてしまった。本学はどんなときも「教育をとめない」を合言葉に感染防止対策と教育環境の継続に注力してきたが、地域交流という側面からは否応なく自粛を判断せざるを得なかった。

この2年間、ワクチンの職域接種をはじめ、大学として感染対策を様々に講じてきた。まだまだ収束には遠い状況でもあり様々な意見や葛藤はあつたが、「新しい日常を創りだしていこう」と呼び掛けてきた本学として、コロナ禍により失われてしまったコミュニティにおけるつながり

や絆、地域の賑わいを取り戻すことをめざし、2022年10月、「TACHIBANA THANKS-DAY」をキャンパスで開催するにとつじた。

### 3 世代や立場を超えた交流の場 「TACHIBANA THANKS-DAY」開催 —「ただ楽しむ」ことに込めた想い—

「TACHIBANA THANKS-DAY」は学生、卒業生、教職員の帰属意識を醸成するとともに地域の方への感謝を伝えていく機会としても位置付けた。京都橘に集う多くの人に新しく変化し続ける本学の「今」を感じてもらいながら、共に未来を創っていこうという意思を込めている。

当日は、著名人を招いてのスペシャルライブやトークショー、スポーツイベント、フードフェスといった誰もが参加しやすく楽しめる企画を展開した。また、中学・高校・大学が一体となった「ホームカミングデー」を実施。私立総合学園として、成長、発展してきた背景には、卒業生の活躍や支えがあつたからこそであり、今後も挑戦し続ける母校に期待と誇りを感じてほしいという思いから同時に開催した。

「TACHIBANA THANKS-DAY」は、もう一つと

ても重要な企画を準備した。コロナ禍で2020年度に実施することができなかった入学式だ。「自分と他者の命を守るため、感染者をださないように今はみんなで我慢しよう」という大学からのメッセージに、当時、学生たちは戸惑いながらも受け入れる選択しかできなかっただろう。

本来であれば、大学は、教育や研究活動の場であるとともに、様々な友人と出会い、共に学び、意見を交わし合い、心を動かす経験や、時には衝突も繰り返しながら他者を思いやる心を育み、人間としての成長を遂げる場であるはずである。学生同士で喜び、称え合い、困難な状況も仲間と乗り越えていく経験、他者の意見を受容し、多様な価値観にふれ、新しい世界に入っていく経験があるからこそ、社会にでてから自分軸で物事を判断し、新しい未来を切り拓いていこうとする力になるのだろう。

コロナ禍を、一緒に乗り越えようとしてきた学生たちに對して、大学として、どんなエールを送ることができるだろうか。そんな想いから、企画した「3年目の入学式」。ここでは、世代や立場を超えて「ただ楽しむ」というシンプルなキーワードをもって開催した。

#### 4 異色のコラボによりエネルギー溢れる 圧巻のパフォーマンス

「TACHIBANA THANKS-DAY」のスペシャルライブでは、高校と大学の部活動によるコラボパフォーマンスがメイン企画とした。高校卒業生のバンドや地域の小学生が参加したステージなど普段はみることができない異色のコラボレーションにより、会場を盛り上げた。また、コロナ禍で思い通りにならない日々を過ごした自分たちだからこそ、社会に伝えられることがあるはず、という学生たちの思いから生まれた学園応援ソング制作プロジェクト。シンガーソングライターの河口恭吾さんと共に創った楽曲「STORIES 2022」を吹奏楽部の演奏と共に披露した。その他、卒業生と共に学び続けることの面白さについて語り合ったトークショー、3×3スポーツイベントなど多彩な企画を運営し、約1000名の来場者があった。

本学として初の試みではあったが、大学という知の共同体の中で、多様な人同士が他者を思いやりながらつながりあい、未来に希望をもって、夢や目標に挑戦し続けられる環境を整えていくのだというメッセージと共に、それぞれ



れが一步踏み出す一助になっていければと願っている。

## 5 帰ってきたくなる、集いたくなる 「京都橘」であるために

「ホームカミングデー」を核に現役学生、地域の方も引き込んだ「TACHIBANA THANKS-DAY」。本学における同窓会組織の活性化という観点からは、卒業生と在学生が日常的につながりあえる交流の機会の創出が課題の一つとして顕在化した。また、今後、同窓会企画に新たな層の参加を促していく点からは、男性卒業生や20、30代の卒業生が日常とは異なる空間で新鮮な気づきや楽しさを実感できる事業を継続して展開していくことが必要である。帰属意識や愛校心の醸成といった抽象的なものに留まるのではなく、①卒業生にとって価値あるネットワークであること、②在学時代から交流の機会を提供し、主体的に参画する仕掛けをつくることに、特に注力していきたい。

このためには、同窓会組織への参画意識のハードルを下げる大切である。堅苦しい内容ではなく、学生、卒

業生、教職員、地域の方々が出会いと混ざり合いながら、京都橘というプラットフォームの中で新しい交流の芽が生まれる環境を整えていく。

また、大学は在学期間中だけのものではなく、卒業後のその人の人生を支える存在でありたいと思う。人生100年時代といわれる現代だからこそ、さまざまなライフステージに必要な学び、知識、技術の習得を求められることがあるだろう。本学は、2023年4月より一般社会人、学生、卒業生を対象にした「たちばな教養学校Ukon」を開講する。ここでは、自然や生命のなりたち、社会のあり方、私たちの生き方を問いながら、年齢や立場の異なる人と語り合える場を提供していく。

活発なネットワークを構築していくためには、卒業後からのアクションでは困難である。在学時代の想い出の中に、友人や地域の方と共に卒業生と交流した経験を積み上げ、存在意義を強化していきたい。

多様な人が集い、喜び楽しみながら、未来への期待をわかちあえるような対話を通して、京都橘がいつでも「心のふるさと」であるように、卒業生との新しいコミュニケーションの形を試行錯誤、生み出していきたいと思う。

# 卒業生との関係強化の 起爆剤としての事例紹介

上坂 孝博

学校法人桜美林学園事業開発部長

## はじめに

大学を取り巻く環境が厳しさを増すなかで、卒業生との関係強化の重要性は言うまでもない。卒業生は、学生、受験生およびその保護者、地域、産業界など、さまざまなステークホルダーの特性を併せ持ち、大学にとって特に重要な、財産ともいふべき位置付けである。母校愛を持てば、地域や職場でその魅力を語り、わが子に受験を勧め、機会があれば自分も再び母校で学ぼうと考える。母校に対し、地域や産業界の情報を提供することもある。しかしながら、多くの卒業生が母校愛を持ち、母校支援に意欲的とは

限らない。大学からの一般的な卒業生サービスの施策として、大学広報誌の発送やWebサイトを通じた大学情報の提供、大学施設の利用便宜、ホームカミングデーの招待等があるが、卒業生サービスといっても目新しい取り組みではないため、興味・関心を示すのは一部の卒業生に限定され、母校愛の薄い卒業生には響いていないのが実情である。

大学が卒業生と持続的関係を構築していく一つの方途として、他大学では既に先行して取り組まれているが、卒業生組織の構築、ホームカミングデー、新たな寄付金等、大学と卒業生がつながる意義やそこから見込まれる効果、今後の展望を見据え、新たな取り組みを開始した。

## 1 校友会組織の充実

桜美林大学の卒業生、在学生、教職員、関係者と母校をつなぎ、誰もが安心して参加できるネットワークの構築と卒業生（校友）の益々の活躍・母校の発展 充実を目指し、2018年に桜美林大学校友会を発足した。発足当時は、申し込み者だけが校友会会員となったが、2023年3月以降卒業生は、卒業と同時に10年間の校友会会員となるよう制度を整え、これ

に合わせて2022年4月、校友会を一般社団法人化した。

校友会会員には校友会公式LINEアカウントでのデジタル会員証を提示することによる割引サービス等さまざまな特典を設け、現在9社からの特典を提供いただいているが、今後はさらに福利厚生サービスを導入することも検討している。2022年7月から校友会会員の交流の場、学園のシンボルとして「桜美林学園東京倶楽部」がオープンした。所在地はビジネス・商業が息づき、「歴史と文化の中心」でもある東京都新宿区の四ツ谷駅徒歩3分のコモレ四谷内教育棟グローバルスタディースクエア3階である。

オープン後は一都三県の卒業生、あるいは地方からの卒業生の憩いの場となり、新たなコミュニティ形成の場となることに期待している。

また、コロナ禍以前のような大々的なイベントを行うことが難しくなってきたことから、「月イチホームカミ」という毎月1回の小規模ではありながら、卒業生同士の交流



[写真1] 桜美林学園東京倶楽部

や卒業生と在学生との交流を狙いとしたイベントを開催している。これまでに、以下のようなイベントを実施している。

- 卒業生ヨガインストラクターを活用したヨガレッスン
  - 卒業生落語家と落語研究部との合同寄席
  - 業界研究セミナー
  - プロの写真家から写真の技術を学ぶワークショップ
  - ビジネスマッチを目的としたビジネス交流会
  - 桜美林出身者の声優を2人お招きし、トークイベント
- 毎回多くの反響をいただいているが、多い時では70人程度の参加者が集まる。

(参考) : <https://obirin-hcdstudio.site/2#pastevents>

## 2 ホームカミングデー

本学ではホームカミングデーを2010年から実施している。当初は大学祭と同日開催とし、卒業生の基調講演×懇親会というスタイルでスタートしたが、2019年から校友会と担当部署である校友課が主体となり、卒業生を活用したさまざまなワークショップ、セミナーを同時開催する等、新たな取り組みを開始した。

特に学生への「ホームカミングデー」の認知を高め、卒業後に自身が参加する「自分ごと」としてのイメージを持つてもらおうよう、在学時からアルバイトとして積極的に関与する機会を提供している。SNSも積極的に活用し、一時期は毎日投稿することでフォロワー数を増やす施策を行いホームカミングデーへ向けた発信力の強化を図った。また、卒業生のトーク、卒業生同士や学生との対談、学長、卒業生、学生とのパネルトークなど、グローバルに活躍している卒業生にさらなるフォーカスをあて、学内関係者が自分ごととして見るができるコンテンツ作りを心掛けた。

2020年、2021年はコロナ禍のため、オンライン開催とした。桜美林大学のYouTubeチャンネルからさまざまなコンテンツが配信され、どなたでも楽しめるイベントになっている。リポーターには学生を登用し、オンラインであっても卒業生が応援したくなるアットホームな雰囲気作りを努めた。

### 3 「100年桜まつり」 「リ・ユニオン&ホームカミングデー」開催

2021年に創立100周年を迎えた桜美林学園は、コ

ロナ禍によって延期となっていた記念式典を2022年の5月に実施し、11月12日に大学・中学・高校・幼稚園の卒業生が一堂に会する「全てのオベリンナー来校の日」として、さらには在学生、父兄、近隣住民も巻き込む大きなイベントとして「100年桜まつり」を開催した。コロナ禍後初の対面イベントで、複数の会場からの配信も行うハイブリッド型で実施し、当日は約2000人が来場した。

学生生徒の演技披露や、設置校長らによるパネルトークといった企画の他、クラスや学部・学群、業種、年代、部活、ゼミなど、コミュニティ別に集まれる場も用意した。さらに、卒業生・在学生、教職員、学園関係者で作り上げた、創業者清水安三の生涯を描いたオリジナル合唱劇「合唱物語 石ころの生涯」の上演。単に大学からの情報発信や卒業生との関係強化だけでなく、卒業生、在学生、教職員、さらには地域の皆様とともに、次の100年に向け新たな出会いと交流の場となる



[写真2] 100年桜まつり

ような企画を実施し、多くの方に楽しんでいただいた。

#### 4 桜美林独自の募金「ふるさと桜募金」

自治体のふるさと納税をヒントにした、寄付者が返礼品を選ぶことができる寄付システムで、返礼品は卒業生の手掛けるものやキャンパスが所在する地域の特産品など、学園にゆかりのあるものを揃えている。

卒業生の手掛けた返礼品をきっかけとした卒業生間のコミュニケーションづくりだけでなく、地域への貢献、そして新しいコミュニティ形成への可能性を秘めている。実際に寄付をしていただいた皆様からの声として「愛校心が強まる」、「寄付したことが記念に残る」、「学園や卒業生とのつなが



[図1] ふるさと桜募金

りを実感できる」との声が寄せられている。

この取り組みは単なる寄付ではなく、卒業生とのコミュニティ形成のためのミッションと考えており、今後さらに返礼品数も増やし、この取り組みを拡充したいと考えている。

(<https://kifu.obirin.jp/howto/gift>)

#### おわりに

本学園は100周年を迎えるにあたり、「桜美林学園の独自性を強め、尖らせていく」という意味を込めた新長期ビジョン「Unique & Sharp」を策定した。策定には多様なステークホルダーの声も反映している。卒業生重視の背景には、多様なステークホルダーとのコミュニケーションに対する大学の意識の高まりがある。

今回ご紹介した取り組みを継続すると共に、新たな取り組みを通じ、卒業後も卒業生と大学との関係が継続すれば、その家族、地域や産業界など、多様なステークホルダーとのさまざまなつながりを通して「大学ファミリー」を拡大し続けることができる。すなわち、卒業生の共感と協力こそが、大学の永続的な発展を支えたと考えている。

# ホームカミングがもたらす

## 豊かな時間とは

―母校はなにゆえ「マザー」であるのか―

中里 則之

立教大学総長室次長兼渉外課長

### はじめに

立教大学校友会ホームカミングデー（以下、ホームカミングデー）は、2022年の開催で60回を迎えることとなった。10月16日に迎えた当日、「3年ぶりの対面開催」「母校の55年ぶりの箱根駅伝出場（前日に決定）」などの状況も重なり、前回（2019年）の約2倍近い1万5千もの入場者を得た。本学池袋キャンパスの想定するキャパシティを大きく超え、各催し物、売店は大いににぎわい、午後には売り物がなくなる店が続出するなど、「これまで経験したことがない」大盛況の1日となった。



[写真1] 正門入り口

ホームカミングデーは校友による校友のためのお祭り。母校を懐かしむ来場者の顔は一樣に笑顔で、他の学内イベントにはないアルコール類の提供などもあり、「お祭り」としてのキャンパスの賑わいを楽しむ1日となった。

### 1 立教大学のホームカミングデー

さて、本学校友会のホームカミングデーだが、基本的には企画・運営すべて現在は校友会が担っている。形としては「大学・校友会共催」として運営予算の一部を大学も負担しているが、直接的に大学が運営に携わることはない。大学は施設を提供し、施設利用に際してのサポート、清掃などを行う関わり方になっている。

校友会の組織のうち「専門委員会」という7つの委員会を中心に実行委員会が立ち上がり、企画と当日の運営全般を担う。委員は校友がボランティア

で着任し、当日は委員会ごとに役割分担が振られることになる。総務委員会は受付、財務委員会は子供縁日、組織委員会は大福引大会など、委員会単位での仕事として休日返上で参加していただいている。

全体的なプログラムとしては、ミッションスクールらしく朝の礼拝から始まり、オープンマーケット「図1」、子供向けアトラクション、著名校友の講演会、大福引大会へとつなが

**OPEN MARKET**

## オープンマーケット

時間 | 10:00~16:00  
場所 | 4丁目~8号館前付近

青空の下、お買い物をお楽しみいただけます。

団体名	出店概要	団体名	出店概要
1 ホニー乗馬体験受付		16 不動産立教58会	豚汁・がんもち等
2 樋口真理	吹きガラス食器、ウールのマフラー等	17 三木部	おでん、日本酒
3 ハッピーママ	手芸品、服、バッグ等	18 常の縁	立教関係者が製造するアルコール類
4 ルート	オリジナルトートバッグ制作	19 熊谷立教会	日本酒、梅酒、酒粕、五常宝、雑貨、甘酒等
5 社会保険労務士セントゴール会	社会保険労務士による 社会保険・労務問題等の相談コーナー	20 練馬立教会	ワイン、パン、書籍
6 行政書士立教会	無料法律相談会	21 立教セカンドステージ大学 ユネスコクラブ	本、タオル、食器等
7 皇島立教会のカミオのテント	ネックレス、ピアス、ストラップ等(値札の半額で販売)	22 キャンパスツアー受付	
8 立教大学交響楽団	定期演奏会チケット	23-24 本部	
9 立教学院会連帯	立教カレンダー、立教グッズ等	25-28 校友会レディスクラブ	コーヒー、紅茶、焼き菓子、手芸小物、 校友会レディスクラブ広報
10 さかなげけ立教会	カフェラテ、コーヒー、紅茶、クッキー、パウンドケーキ	29 ビジネスデザイン立教会	オムライス、ソーセージ、手作りフルーツ ドリンク、コーヒー、各種デザート
11 セントポールライオンズクラブ	お花、化粧品、雑貨	30 体育会アメリカンフットボール部	アメフトグッズ
12 横浜立教会	生ビール、焼きおにぎり	31 体育会女子ラクロス部	オリジナルグッズ
13 公益財団法人キープ協会 清泉寮	清泉寮についてのパネル展示、 クッキー、ミルクジャム、牛乳せんべい等	32 体育会ラグビー部	ラグビーグッズ
14 わいちゃんのおぼろ餅	おむすび、ソフトドリンク	34-38 縁日	
15 湘南立教会	湘南の特産品		

**● 体育会グッズ販売**  
体育会グッズを買って、頑張る学生たちを応援!

**アメリカンフットボール部**

**女子ラクロス部**

**ラグビー部**

**● ルート**  
自分だけのオリジナルバッグが作れます!

[図1] ホームカミングデーのオープンマーケットの案内

る。大学としては狭い敷地を全面に使ったオープンマーケットは今年度合計28店舗。それ以外にもキッチンカーが10台入り、華やかで賑やかなホームカミングデーとなった。

また、日程面で2002年にそれまで開催日を固定していた11月3日文化の日から10月中の日曜日に移して、学生の学園祭との競合を避け、キャンパスを全面使用することで来場者を飛躍的に増加させることができるようになった。

このことは、キャパシティの大きいホールの使用や模擬店の出店数の増加のみならず、大学に帰ってきた校友の「居場所」を学内各所に提供することを可能とした。ようやく「ホームカミング」の本来的な役割を果たせるようになってから20年、千人に満たなかった来場者は今や1万人を超える一大イベントに拡大することができた。現在は、校友のみならず、立教学院各校、地域住民への案内も含めて「ホームカミング」の対象を広げて、シンボリックなキャンパスでの1日を楽しんでもらっている。

## 2 大学と校友会のホームカミングデー

前述のとおり、本学のホームカミングデーは大学と校



[写真2] 立教サイエンススクール(理学部化学科)



友会の共催であるが、大学は基本的には企画・運営に携わることはない。別の言い方をすると、このイベントに対して何らかの戦略的意図をもって臨んでいるという状況ではない。

もちろん、このイベントが多く、校友が運営に自主的に携わる場として「イベントとしての役割分担」が極めて上手くいっているとも言える。大学の方は新入職員を業務上の「動員」として派遣し、手伝いに加わることで校友の存在や息遣いを感じる貴重な場になっている。

ステークホルダーとしての校友会は、常に法人、大学との間でも密な関係を築いており、トップ間の情報交換も盛んである。校友会の各種行事への大学幹部の参加、そこでの大学の近況報告なども毎度きちんと行われている。そういう関係性の中で、大学にとってホームカミングデーは「校友に純粋に大学での1日を楽しんでもらう」ということで、例えばそこでの募金要請活動なども最小限にとどめてきた。このことは消極的なアプローチではなく、「立教らしい奥ゆかしさ」を体現したものであると感じている。

一方で近年、本イベントの状況に注目した学部・大学

院からの参加希望が出るようになってきた。今年度は理学部化学科(立教サイエンススクール)、大学院人工知能科学研究科、立教セカンドステージ大学が教室を使つてのイベントを開催し、多くの参加者で賑わった。今後はこのような形でホームカミングデーを活かしていただき、卒業生へのアピールの場として利用していくと、「共催」の意味がさらに深まっていくことになると考えている。

### 3 ホームカミングデーの新たな展開 バーチャル同窓会などの運営

新型コロナウイルス感染症の拡大によってもたらされた大きな変革のひとつが「オンラインによるコンテンツの配信の一般化」であろう。2020年度、2021年度のホームカミングデーは全面オンライン配信の形で実施し、ドローンを使った母校からの生中継や著名校友をキャストイングしながら最大限のコンテンツを盛り込んだ。その結果、1万人以上の視聴があったという数的成果だけでなく、これまでホームカミングデーに来られなかった海外をはじめとする遠方在住の校友からの反応があったことは主催者として

得た大きな成果であった。このことはあらためて「ホームカミング」の意味を問い直すきっかけになった。

また、大学時報406号(2022年9月発行)でも特集で取り上げられたVR(バーチャリアリティ)の世界について、本年のホームカミングデーでも試験的に「バーチャル同窓会」をメタバースの世界で実現させるという試みがなされた。仮想空間上に本学キャンパスのシンボリックな建造物や学生食堂などを設置して、そこに「みんなが集まろう！」という仕掛けにした。同窓会自体の参加者はあまり多くなかったが、当日設けられた体験ブースには次世代を担う子供たちを中心に多くの来場があり、改めてその関心度の高さを思い知ることになった。

仮想空間上の集まりでも「同窓会」には変わりはなく、アバターであっても「昔懐かしいあの人？」なのであろうか。そのあたりの解釈については、今後この仕組みの普及と一般化の状況を見て考えていくことになろうが、どういう形であれ「集まる」ことを優先に考えていくことに変わりはない。

そして、オンライン授業が一般化した今、キャンパスそのものの存在も価値観も変わっていくことになるのだろうか。そのあたりの価値判断は次世代に引き継がれることになる



[写真3]バーチャル同窓会

が、仮想世界の出現に校友会活動の変革の息吹を感じざるを得ない。

### おわりに

本学池袋キャンパスの正門を入ると、正面にレンガ造りの時計台のある校舎、左右対になったチャペルと旧図書館が目に見え、同じく左右対になったヒマラヤスギの間を通り、時計台の下を抜けると手入れされた芝生とその奥に第一食堂が。立教の卒業生なら誰でも目に浮かぶその風景。大学はこのレンガ建物群を「メモリアルゾーン」として永久に残すことをキャンパスメイキングの中に常に位置付けてきた。このこと自体が大学にとっての大きな矜持であり、卒業生に向けての何よりのメッセージであると思っている。

ホームカミングデーはそういった卒業生が母校を訪ねるきっかけ作りに役立っている。参加者からは「ホームカミングデーが久しぶりに大学でやるから、友達誘って行ってみようか」「行けば誰かいるかも…」という声が。これだけで、このイベントは目的を達成したようなものである。講演会も

模擬店も単なるお飾りで、大事なものはもつと別の世界にあるわけだ。

キャンパスを歩く参加者の顔は日常生活とは違った笑顔に溢れている。そんな時間と空間を提供すること、それが「また来てみようか」「みんなが集まりたいね」「うちの子も立教に入りたい!!!」という声につながっていくことを願うばかりだ。

キャンパスは基本的にはいつでも開放され、卒業生でなくてもその門をくぐることができる。だが、そこにいた人間がこの門に入ってそこにある空気を吸い込んだ時、長い人生の中でたった4年という時間、されど青春時代のかけがえない4年間がよみがえる。時にはその宝の箱を開けてもらえるよう、母校(マザー)は連綿とレンガの校舎を守り続けるわけなのだ。

そんなお祭りのような1日があってもいいはずだ。

# オンライン授業への工夫と成果

森岡 大輔

拓殖大学工学部准教授

講義をする上で重要視していることは、学生たちが視野を広く持てるよう、さまざまな分野の知識を講義資料に盛り込むことである。私は修士修了までにバイオマテリアルや機械工学を専門としていたが、就職では趣味が高じてSEやインフラエンジニアを経験した。その後、福祉工学を勉強している。就職で開発の現場に身を置いたことで、社会人の有する専門知識の深さと相反する「知識（視野）の幅」の狭さに畏怖の念を抱いたことを今でも覚えていいる。私の他分野で培った経験を盛り込んだ講義を受けた学生には、身をもって「知識の幅」が武器になるかを体験し、重要性を理解してもらえよう工夫を凝らしている。この工夫について、講義系科目であるUX（ユーザー・エクスペリエンス）デザインについて紹介する。

この科目は2020年度からの新規開講科目であるが、コロナの影響を受け開講早々にオンライン講義としてしまった。対面であれば学生の顔色から理解度を判断できるが、オンラインでは学生に伝えたい内容が伝わっているかなどを確認する術がないことのほか、これまで教育する立場に身を置いた経験がないことも相まって不安しかなかった。そこで学生の理解を深めるための手法として、(1)身近な例を参考に上げること、(2)考えⅡアイデアを求める課題を出題すること、(3)スライドの構成だけでなく配色にも気をつけること、(4)質問をしやすい時間を設けることの4つを取り入れた。

なぜ(1)身近な例を参考に上げることが必要なのか。それはUXという学問が概念であり、直感的に分かりづらいからである。したがって、学生たちが興味を持つスマートフォンのカメラ機能を取り上げ、「その製品を利用している理由」や「写真を綺麗に撮りたいのはなぜか」、「なぜ簡単に撮影できることを望むのか」などを考える時間を設けたり課題として出題したりしている(この項目は(2)考えⅡアイデアを求める課題を出題することにも該当)。またこの講義で学習した理論が世間のどの

ような場所で利用されているのか、国内規格か国際規格かなども踏まえ、私自身が過去に撮影した写真をスライドに盛り込むことで理解を促すようにしている。

(3)スライドの構成や配色にも気をつけることについては、人間工学／福祉工学を専門とする私が最も注力している項目である。対面・オンライン授業の両方で、教員は授業を受ける学生の立場で資料を展開しているかということである。構成では論理展開ができているかは当然のこと、文字サイズ、日本語／英語フォント、1スライドに記載する文字数や行間、余白を気にしているかが重要である。またスライドの配色では、白地が多くなると眩しくなり目の疲れの原因となるため、黒地に白文字としている。さらに学生全員が必ずしも健常者であるとは限らない。例えば、緑と赤の組み合わせは色覚異常を有している人からすれば識別が難しく、同じ色(グレー)に見えてしまうことがある。他に、紫を識別できない場合もある。このような学生にも配慮するため、カラーユニバーサルデザインのもと、色の指定と組み合わせの徹底や、事前に色のシミュレーションアプリの活用で識別のしやすさに取り組んでいる。

(4)質問をしやすい時間を設けることでは、授業の終盤10分程度を利用して、ミニテストを実施する際に自由記入欄を必ず設けるようにしている。またそこで記載された内容については、授業との関係にかかわらず、全ての内容に回答するように心がけることで学生との関わりを持つようにしている。これにより、対面では相談しづらい学生からも、積極的な質問や相談を受けるようになった。

これら4つの工夫を実践し続けた結果、80人程度であった受講生が、2022年度では2倍以上の200人ほどに増加した。その一方で、改善が必要な点についてもいくつが存在する。そのなかでも優先して解決に取り組むべきことは、準備時間の低減である。現状では、授業準備やフィードバックに要する時間に、少なくとも授業時間の10倍程度かかることも少なくない。他にも、オンラインだと質問しにくい学生が少なからずいることなど、まだまだ改善の余地があることも事実である。

これからも工夫をこらし取り入れることで、より良い授業展開を心がけるとともに、学生の知識の幅を広げられる授業へつなげたいと考えている。

[関西学院大学]

## 新月の夢

加藤 知 関西学院大学副学長・理学部教授

### はじめに

月、それは夜空でもっとも明るく、満ち欠けを繰り返す天体。この月、特にこれから満ちていこうとする新月(三日月)が関西学院の校章のモチーフになっている。キリスト教主義を基盤としている関西学院の校章には、太陽光を受けて輝く三日月は、神の恵みを受けて輝き、理想を憧れ求め夢を育んでいく精神が刻まれている。

1609年、この月に望遠鏡を向け、山あり谷ありの表面を観察して、天上と地上の同質性を確信したガリレオは、科学革命の端緒を開いた。ここでは、望遠鏡は新たな世界観を切り開くイノベーション・ツールであっ

た。2022年9月竣工した新棟の屋上に設置された天体観測ドームと反射型望遠鏡もまた、見えないものに目を向け、新たな発想を誘発する場として、理想を追い求める学生たちにとってのシンボルとなってくれることを期待している。

### 1 望遠鏡設置の経緯・目的

望遠鏡設置へと至る道のりは、建学150周年に向けて作成された超長期ビジョン「KWANSEI GRAND CHALLENGE 2039」に始まる。ここでは、「スクールモットーである「Mastery for Service(奉仕のための練達)」を核として社会や世界に貢献して「真に豊かな人生」を送るための基盤を作ること」を目標として掲げ、様々な中期計画が策定されている。その中で理系充実が計画され、2021年度よりそれまで理工学部1学部であったものを、理学部、工学部、生命環境学部、建築学部の4学部に拡張し、理系学部のある神戸三田キャンパス(KSC)の活性化、ひいては大学全体のブランド力向上を目指す改革を行った。理学部には物理・宇宙学科が設置され、我々の存在の根源を探る宇宙研究を推進していくことを学科

名に明示した。学科内には、電波からX線まで幅広い波長領域をカバーする研究者が揃っており、宇宙研究の拠点形成を目指している。物理・宇宙学科の設置をきっかけに、教育研究の活性化だけでなく地域貢献にも資するものとして、望遠鏡の設置が学長主導で決定された。こうした経緯から、物理・宇宙学科での利用が主とはなるが、それ以外の一般利用も視野に入れて、管理運営はKSC全体の連携を協議する委員会の下で進めていく体制の準備をしている。

## 2 望遠鏡の利用開始に向けて

今回設置された反射型望遠鏡は、主鏡が凹面鏡、副鏡が凸面鏡のリッチー・クレチアン式望遠鏡で、球面収差やコマ収差がなく広い視野の観察に適した望遠鏡である。天体ドームは新棟建設に組み込んで設計したため、使い勝手のよいものになっている。広視野であるのに加えて、透過率が高い赤外線の見え方が可能であるため、可視光では見えない生まれだての星や星雲の中を見ることができ、様々な教育研究に利用できる」と期待している。

すでに一般公開についての問合せも来ており、近隣の

天文ファンからの熱い視線を感じている。キャンパスのある兵庫県三田市の野外活動センターにある望遠鏡の利用者や近隣の高校の天文クラブの学生、大学内の天文関係のサークルなどから歓迎の言葉を聞いている。また三田市長との懇談でも、市内小中高生への教育利用等での連携の期待が寄せられた。具体的な活用方法は現在検討中であるが、地域の教育への貢献、正課外活動での利用、大学間での連携など授業外での利用も積極的に進めようと考えている。拡張しやすい構成になっており、順次拡張して特色ある設備にすることも検討していく。まだ準備段階であるが、学生には望遠鏡で夜空を眺めながら大きな理想と夢を膨らませてほしいと願っている。



[写真]神戸三田キャンパスに設置された天体観測ドームと反射型望遠鏡

[國學院大學]

# 伝統文化の継承と教育 —國學院大學の観月祭における取り組み—

小林 宣彦 國學院大學神道文化学部准教授

## 1 観月祭とは

國學院大學では、毎年10月に、観月祭という行事を学内で実施している。

「観月」とは、月を愛でながら眺める行事であり、主に、秋の名月の時期に行われる。古代中国から伝来した行事とされ、平安時代には、宮中や貴族社会で恒例行事化した。当時は、詩歌や管弦を楽しみながら酒を酌み交わす典雅な催しであった。時代が降ると、お月見に祭壇を設けるようになったとされる。

こうした観月の風習を伝統文化として、國學院大學では「観月祭」として実施している。

当日は、観月祭にともなう祭祀を行い、その後、雅楽が演奏

され、舞楽が舞われる。200人程の観客席を設けるのだが、定員に対して2倍を超す応募がある人気の行事である。観月という文化を広く発信するため、観月祭の様子は撮影され、後日配信される。

## 2 学生が担う観月祭

観月祭の準備は、例年、5月の連休の頃から始まる。準備が5カ月にも及ぶのは、学生たちが雅楽を演奏し、舞楽を舞うため、その練習に多くの時間がかかるからである。多くの学生たちは、本格的な舞台での経験が少ない。そのため、練習指導に小野雅楽会から数人の講師を招き、学生たちは5カ月に及ぶ練習に励むのである。

また、観月祭の準備や実行も学生たちが行う。雅楽や舞楽を担当する学生とは別に、準備と実行を担う学生たちがいるのである。この学生たちが担うのは、会場の準備と片付け、道具の運搬と撤去、観客の受付と誘導など、要するに裏方の仕事である。

この他にも、当日の祭祀を担当する学生、舞楽装束の着装（衣紋）を担当する学生など、多くの学生が、それぞれの技能を活かしながら観月祭に参加している。



### 3 観月祭を支える組織

観月祭における学生たちは、雅楽、舞楽、祭祀、衣紋、準備・実行と、複数の担当集団に分かれている。これらの集団を統括するのは神道文化学部であるが、一方的に指示するのではなく、観月祭に向けて為すべきことを考えさせ、気付かせるよう配慮している。また、それぞれの担当集団を連携させることにより、モチベーションが高まるといふ相乗効果が生まれる。

観月祭で使用する舞楽装束などは大学の所有であるが、かなり高価なものであり、観月祭のみに購入・使用されているわけではない。國學院大學の神道文化学部は、神職養成機関としての役割もあるため、卒業生には多くの神職がいる。この卒業生神職たちが組織するのが「院友神職会」である。院友神職会は、学生の教育を目的に大学に支援をしており、装束類は、そうした教育の一環として購入されている。普段は、授業や講座の教材として活用されている装束類が、観月祭でも使用されるのである。さらに、衣紋の技術を有する教員たちが観月祭に携わっているため、舞楽装束の着装を学生に指導することができている。

観月祭は、こうした大学の特徴を最大限に活かした行事であるとも言える。

### 4 伝統文化継承の今後

コロナ禍により中止されていた観月祭であるが、伝統の継承という点を重視し、令和4年に実施された。伝統の継承は、集団の持つ技能・知識の継承でもある。モノが揃い、技術を有する人がいるだけでは、継承は難しい。学生の持つ能力を連携させ、その集団の力を、さらに次代の学生たちに継承させることが、観月祭の持つ教育効果と言えるのである。



[写真] 國學院大學の観月祭の様子

[京都産業大学]

## 「大宇宙の旅」を夢見て

河北秀世 京都産業大学理学部教授・神山天文台台長

京都産業大学の創設者である荒木俊馬博士は、著名な宇宙物理学者・天文学者であると同時に、多くの天文学に関する啓蒙書を残した熱意あふれる教育者でもあった。荒木先生の書かれた天文学啓蒙書の代表作である『大宇宙の旅』は、多くの若者たちに夢を与えた。京都産業大学は、そうした荒木先生の教育・研究に対する熱意を背景に、1965年に理学部と経済学部の2学部体制でスタートしている。当時の（そして現在の）社会は、科学技術と経済によって支えられており、荒木先生はその重要性を強く意識されていたのである。また、荒木先生は「大学は実社会から遊離した象牙の塔であってはならぬ」と考えており、

「産業」をその名に冠する本学において、産業界と大学との協同を非常に重視しておられた。この荒木先生の想いを具現化するため、2010年4月に、本学キャンパス内に神山天文台が設置された。

大学が望遠鏡を備えた施設を持つとしたとき、多くの場合、「○○天文台」という名前の「望遠鏡を収めた丸いドーム屋根の建物」というイメージが思い浮かぶ。これはあくまで建物としての「天文台」である。神山天文台が目指したものは単なる建物にあらさず、荒木先生の想いを具現化する人材、組織そのものであった。神山天文台という組織は「3つの顔を持つ」ことを基本としている。「教育の場としての神山天文台」、「世界一級の天文学を推進する研究所としての神山天文台」、そして「地域の市民・産業界に対する大学の窓口としての神山天文台」である。

神山天文台の建物には、口径1.3メートルの反射望遠鏡（国内私立大学最大）「荒木望遠鏡」をはじめとして、極めて高性能な光学実験機器を備えた複数の実験室が整備されており、天体からの光を分析する「天文観測機器」の開発を行っている。こうした世界一級の環境で学生が教育を受けることができること、また、後述するように他の

国内研究機関や企業との協働の中で学生たちが様々な経験をすることのできる場を提供することが重要と考えた。これまでに京セラ(株)やキヤノン(株)をはじめ近隣の企業等との連携を行っている。そうした場での経験を活か

して、関連業界で実力を発揮するに至った卒業生も多い。本理学部には物理科学科や宇宙物理・気象学科といった天文学に関係の深い学科もあり、関連学部のカリキュラムと連動して様々な授業科目(おもに実験・実習系の科目)で、神山天文台の各種設備が利用されている。もちろん、世界最大級の可視光望遠鏡と比較すれば、荒木望遠鏡は「小型」の望遠鏡でしかない。しかし、たとえ小さな望遠鏡であっても、産業界と連携し独自の天文観測装置を開発することで、天文学において重要な発見をなし、世界第一級の成果をあげてきた。一方、大学による知の還元という観点から、従前より一般市民向けの天体観察会や講演会を実施してきたが、今年からは神山天文台の建物を一部改修し、博物館機能を拡充した。技術開発と天文学の発展という切り口から、常設展示や企画展覧会を行っている。2022年11月には、宇宙航空研究開発機構(JAXA)の協力を得て、京都府で唯一となる小

惑星探査機「はやぶさ2」の帰還カプセルおよび小惑星リュウグウの欠片の实物展示を行った。

以上のように、神山天文台の本質は「ものづくり」であり、それを教育に、研究に、そして産業界との連携に活かすことを神山天文台の活動の根幹に据えて活動が続けている。そのため、天文観測装置の開発で国内屈指の実力を誇る(株)フォトクロスや京セラ(株)、キヤノン(株)といった企業と連携し、企業の方々との協働の場を提供してきたが、これこそが神山天文台の成功の秘訣であったと考えている。神山天文台設立10周年にあたる2020年には、今後10年の目標として「京都産業大学 神山天文台宇宙へ」をスローガンとして掲げた。これまでの大学の歴史をふまえた経験をもとに、本学学生の活躍の場を地上の世界だけでなく宇宙にまで広げたい。天文観測機器の開発で培った技術を活かして、小型衛星に搭載可能な、小型・高性能な観測装置の開発を目指している。今後10年以内に京都産業大学の名を冠した人工衛星が産学協働によって打ち上げられ、本学学生が宇宙を活躍の場とする日を夢見ている。本学学生の活躍を、荒木先生は喜んでくださるに違いない。

CLOSE-UP  
INTERVIEW**森敏**さんに聞く東海大学 国際文化学部教授、  
長野・ソルトレークシティオリンピック スキー・ノルディック複合日本代表

「聞き手」外川 智恵さん 大正大学表現学部教授

オリンピックから研究者へ  
大学での学びを生かして  
後進の指導に当たる

もり・さとし

1971年生まれ、長野県下高井郡野沢温泉村出身。1998年長野オリンピック、2002年ソルトレークシティオリンピック スキー・ノルディック複合日本代表。2003年に現役引退後、中京大学に入学。同大学大学院で体育学を専攻後、2010年から東海大学国際文化学部札幌キャンパスで専任講師に就任、2021年より教授。同大学スキー部のノルディック担当監督も務める。

## 睡眠も含めて24時間がトレーニング

**外川** 本日は、1998年の長野オリンピックと2002年のソルトレークシティオリンピックでスキー・ノルディック複合日本代表として活躍され、現在は東海大学国際文化学部教授を務める森敏先生にお話を伺います。大学時代のお話から、選手として活躍され、指導者・教員としての現在の取り組みまで幅広くお聞かせいただければと思います。東海大学の札幌キャンパスはちょうど紅葉が綺麗な時期ですね。先生の地元である長野県の野沢温泉もこのように豊かな自然に囲まれた場所だったのででしょうか。

**森** 生まれ育ったところはスキー場の麓でしたので、もう少し大きな山に囲まれていました。

**外川** スキーに取り組む環境に恵まれていたのですね。

**森** 私の家は代々スキー一家で、祖父はスキージャンプ、父はアルペンスキーをやっていました。そうして受け継がれてきたものが、私にも大きく影響しているように思います。長野県で生まれ、2歳までは埼玉県に住んでいましたが、父が子どもたちにスキーをさせたいという思いから、母方の実家である長野に移住しました。父のそう

した決断が、私がスキー選手として成長できた一つの要因だと思っています。

**外川** 現役時代は1日にどれくらいの練習量をこなされていたのでしょうか。

**森** 私がやっていたノルディック複合は、スキージャンプとクロスカントリースキーを組み合わせて総合成績を競う競技でした。スキージャンプは瞬発力、クロスカントリースキーは持久力と、それぞれ異なる能力が求められます。そのため、両方を練習するとなるとかなりの時間を要します。午前中はジャンプの練習でウォーミングアップも含めて約3時間、午後はクロスカントリーの練習を2〜3時間、その後のリカバリーで約1時間を費やす感じだと思います。とにかく、トレーニングに時間がかかる競技でした。

**外川** では、ほぼ1日中スキーの練習をされていたのですね。

**森** そうですね。現役時代は、睡眠も含めて24時間トレーニングでした。眠らないと回復しませんし、眠ることによってトレーニングしたものが次へと生かされますから。また、練習をして疲れたら、次の練習でやる気を出すためにも計画的に気分転換する予定を組んでいました。経験を積

むことでそうしたさじ加減が分かってくるんです。

**外川** 先生はご自身でトレーニングをマネジメントしていらしたのですか。

**森** そうですね。当時、ワールドカップに出場していたトップ選手たちはセルフマネジメントに長けていたので、言われなくても練習しますし、遊ぶ時は遊びます。そのように同じ方向を向いて戦っている選手たちといると、とても居心地が良かったです。オフシーズンには、同じスキー選手の荻原健司さんと2人で旅行したりしました。他のスキー選手たちとも1年中一緒に過ごしているような環境でしたので、外国人選手も含めて選手同士がとても仲良くなるスポーツだったと思います。

## 勝つためには頑張るだけでなく 遊び心も必要

**外川** 1998年の長野大会で初めてオリンピックに出場されましたが、オリンピック選手になるんだという自覚を持たれたのはいつごろのタイミングだったのでしょうか。

**森** オリンピック日本代表候補にはずっと挙がっていました

たが、必ず出場できる位置

で来たのは開催直前でした。前年の成績がとても悪かった

ので、代表には入れないんじゃないかと思っていました。

**外川** オリンピックを目指していた当時の心境を教えてください。

**森** 長野オリンピックの開催が決まるまでは、地元である長野でオリンピックに出場することはあくまで「夢」でした。しかし、開催が決まったことで、「夢」から「目標」に変わったんです。それから改めて気を引き締めて、目標を達成するために努力を続けました。長野には同じように地元開催のオリンピックを目指す選手も多かったのですが、切磋琢磨しながらも厳しい代表争いをしていました。

**外川** プレッシャーを受けながらも、オリンピックに向けて準備をされていたのですね。

**森** 私自身、地元でのオリンピックに臨むに当たって、準備が十分でなかったと思っています。前年の成績が悪かったため、まず出場することを目標にしてしまい、メダルを取ると



外川 智恵さん

いうことに対しての準備がおろそかでした。出場できるかどうか分からない状況で、身体の準備も道具の準備もうまくできなかった。それが悔やまれるところです。

**外川** こうした経験の一つずつが、後の教訓として生かされていくのですね。

**森** それがなかなか生かされないんです。勝負の世界は厳しいので、正しいことをやっている人が必ず勝つわけでもありません。勝つのは一人だけですから。

**外川** 勝つためには何が必要なのでしょうか。

**森** やはりいろいろな運を迎え入れることができるだけの準備をしておくことが大事だと思います。運だけで勝てるわけではありませんが、最終的に勝つ人は、日頃から運を呼ぶような行動をしています。私にはそうした行動が足りませんでした。また、私は少々真面目に競技に取り組み過ぎたのではないかと感じています。荻原健司さんから遊び心が足りないと言いつけられたことがあります。



森 敏さん

真剣に取り組み過ぎるとどうしても視野が狭まり、理解すべきことを理解できなかったりします。そうした経験を踏まえて、現在は指導者として、遊び心を持ちつつ、運を引き寄せるような行動をするように意識しています。

**外川** 遊び心と努力のバランスの取り方は難しいでしょうね。

**森** とにかく練習を頑張らなければと気を張っていると、突然、気持ちが悪くなってダメになってしまうことがあるので、厳しい練習であっても、楽しみながら日常生活に取り込んでいかなければいけないと考えています。

**外川** 頑張り過ぎずに練習を続けるには、本当にスキーが好きでないと難しそうですね。

**森** そうですね。スキーが生活の中での一番の楽しみであり、それをさらに楽しむために生活があるという形が理想です。

## 学びの楽しさを知り 30歳を過ぎて大学に進学

**外川** 学生を指導する際に、いろいろとご苦労がある

かと思いますが、どのような指導方針で臨まれていますか。

**森** 冬のシーズンが終わると、試合で成果を出せず悔しさを感じた選手が、すぐに練習を再開してしまうことがあります。すると、10月ごろになると燃え尽きて、これからという時に気持ちも身体もコンディションが最低になってしまうことが多い。このため、シーズンが終わったらずまず休息を取り、9月ごろまで頑張り過ぎないようにたくさん練習をして、10月ごろから気持ちと身体のコンディションを上げて次のシーズンに臨むように、目先だけでなく、年間を通したセルフマネジメントの大切さを伝えるようにしています。

**外川** 先ほどの遊び心を持つという考え方との共通点を感じます。

**森** 努力することは当然ですし重要なのですが、普段から頑張り過ぎていると、どうしても試合本番で目いっぱいになってしまい、心に余裕が持てません。遊び心があれば、心の余裕ができて、バランスを崩しても元に戻せるなど瞬時の判断ができるようになる。それができないとなかなか上には行けません。そうは言っても選手たちは頑張ってしまうので、私は冗談を言って和ませたりしながら、選手の能力を

引き出せるように心掛けています。教員としては、できるだけ学生たちの楽しさと成長を促すような授業を組み立てることに努めています。実技の授業では、クロスカントリースキーを教えています。スキーをやったことがない学生もいるので、とにかく楽しいと感じてもらい、卒業後もやってみたいと思われるような授業を心掛けています。

**外川** 選手の誰もがオリンピックのような檜舞台に出られるわけではありません。別の道を探すことになる選手もいるかと思いますが、先生は彼らとどう向き合われていますか。

**森** 世界に出ていくような選手はほんの一握りですが、選手全員が代表選手に選ばれるわけではありません。また、いつまでも競技生活を続けられるわけではありません。どこかで区切りをつけるよう伝えなければならぬのですが、選手でいる間にはとにかく悔いのないように挑戦させてあげたいと思っています。選手として成功する姿を見るのもうれしいですが、競技を存分に楽しんでから引退して新しい道を進んでいる姿を見るのもとてもうれしいものです。

**外川** 先生はご自身の引退をどのように決められたのでしょうか。



**森** 私は31歳で引退しました。成績が落ちていたわけではなかったのですが、続けていけばもっと良い成績が出ていたかもしれません。自分のこれからの人生を考えた時に次の道に進もうという決断に至りました。当時、メンタル面のサポートをしていたいた先生から、引退する時はいきなり辞めるのではなく、ソフトランディングをすることが大切だと教えられたので、オリンピックが終わった1年後に引退し、中京大学に入学しました。引退したら勉強をしないと以前から思っていましたし、引退してから大学で学んでいる海外の選手たちの話にも影響を受けました。

**外川** なるほど。学ぶ楽しさを教えてくれる仲間がいたんですね。

**森** ドイツに留学していた時にドイツ語を学んで話せるようになったのですが、その時に初めて勉強が楽しいと思えたんです。ヨーロッパでコーチの資格を取って帰国してからも、ずっと勉強をしながら選手生活を送っていました。

**外川** 近年、リカレント教育やリスキリングなど、大人の学び直しが注目されていますが、先生は留学時代やその後のキャリアチェンジという点も含めて一つのロールモデルになりそうですね。

**森** 結果的に大学の教員になれたので、大学に行って良かったと思えますが、子育てをしながら大学で学んでいた時は、実際とても大変でした。ただ、私のようなキャリアを積んできた人間は他にいないので、それは強みだと思っています。

## 競技でも人生でも 生かされた意思決定の力

**外川** お話を伺っていて、意思決定というキーワードが浮かんできました。競技における遊び心と努力のバランスの取り方、人生の分岐点での身の振り方、先を見据えた計画的なキャリア形成、どれも先生の的確な意思決定が反映されているように思います。正しい意思決定をするには、何が大切なのでしょうか。

**森** ノルディック複合という競技では、さまざまな種類の意思決定が要求されます。クロスカントリースキューでは、前の選手をいつ追い抜くか、どこでスパートをかけるかなど、いくつもの意思決定を行うポイントがあります。我慢すべきか、勝負をかけるか、判断を間違えると順位が一気

に下がってしまいます。また、スキージャンプでは、時速90キロくらいで飛び出すので、風の状況を見極めて、どのようなジャンプをすれば最高の飛距離を出すことができるかを瞬時に判断しなくてはなりませんし、飛び出す前には踏み切る姿勢のバランスを取る必要があります。私は当時、日本であまり取り入れられていなかったコーディネーショントレーニングを留学先で学び、バランス能力などを向上させました。それが、私が世界で活躍できた要因の一つだと思っています。

**外川** 意思決定をするための判断材料は、日頃から蓄積しておかないといけないですね。

**森** 頑張り過ぎないようには言いましたが、普段の練習に常に真剣に取り組むことでそうした能力は養われていきます。頑張らないのと手を抜くのは違いますから。

**外川** 大人になるためには不確実性への耐性を付けていかなくてはいけない。不安定であったり、不確実なものを受け止めて、判断していく力を付けたのが大人であると聞きます。先生がおっしゃるように揺らぎの部分も受け止められる度量を築いていくことはとても大事だと思います。

**森** 私は31歳で現役を引退して大学に入りましたが、実際は不安だらけの決断でした。高校を卒業して10年以上、勉強をしたことがない状況で入学するわけですから、不確実性しかないですね。

**外川** とはいえ、実際には現役時代から大学進学のご準備をしてこられたのですから、計画性も備えていらっしゃるのでしょうかね。

**森** どちらかという計画を立てるのはあまり好きではないんです。直感で大きく捉えて行動する方が好きですね。練習もそうですが、一から計画を立てるのではなく、全体を大きく把握してから、その中で計画を組み立てていくタイプです。その方が、もし何かあったときも計画が変更しやすいですから。

## 研究の楽しさを知ることができた 大学は最高の学びの場

**外川** 先生は30歳にして学問の道に入られました。大学ではどのような経験を積まれましたか。

**森** 私は中京大学に進学して体育学を学びましたが、選

手時代には考えられなかったさまざまな経験ができました。大学では、私自身が被検者になって、スキージャンプ中の筋肉の働きを研究しました。筋活動を検出する筋電図という装置を着けてスキージャンプをしたり、複数のカメラでさまざまな角度から踏切動作や空中フォームを捉えたり、すでに分かっていることではなく、まだ分からないことを自分のアイデアで研究することの楽しさを知りました。大学は最高の学びの場所だと思います。

**外川** 実践とご経験を踏まえた研究が今後、競技でも生かされていくのでしょうか。

**森** 今では、そうした研究結果を他のコーチたちが参考にしてトレーニングに取り入れたりしています。スキージャンプという競技の世界と学術的な研究をつなぐ役割を果たせるのは私しかいません。私が研究を進め、それを指導者たちに周知していくことで、日本の競技レベルの向上に結び付けたいと思っています。

**外川** 現在、札幌市が2030年冬季オリンピックの招致に動いていますね。

**森** 長野オリンピックは私が暮らしていた地元で開催されました。札幌がオリンピック招致に成功すれば、また私

が暮らす場所で開催されることになります。そんなタイミングでオリンピックを迎えるチャンスはなかなかありません。個人的なことですが、2030年には私の息子が24歳と20歳になることもあり、大いに期待しています。

**外川** 森家におけるスキーの歴史が紡がれていくのですね。

**森** 子どもがいるからというわけではありませんが、札幌はオリンピックの候補地として理想的だと思います。ジャンプ台や他のスポーツの競技施設も含め、札幌は圧倒的に環境が整っています。こんな場所は世界中を探しても他にはありません。ぜひ、招致を成功裏に進め、素晴らしいオリンピックの開催につなげていただきたいと思います。

**外川** 私も札幌オリンピックの開催を楽しみにしています。本日はありがとうございました。



**河野訓**(かわのさとし)

皇學館大学学長。'88東京大学人文科学研究所博士課程中退。文化庁専門職員を経て皇學館大学へ。'19より現職。博士(文学)。主著『初期漢訳仏典の研究』。

**田中愛治**(たなかあいじ)

早稲田大学総長。'85米国オハイオ州立大学博士課程修了。政治学博士(P.A.D.)。早稲田大学教授、理事等を経て'18より現職。

**辻中豊**(つじなかゆたか)

東洋学園大学学長。'81大阪大学大学院法学研究科単位取得退学。'96京都大学博士(法学)。筑波大学、東海大学を経て'22現職。その間、IAU理事、日本政治学会理事長等。

**齋藤勝**(さいとうまさる)

法政大学文学部准教授。'01東京大学大学院人文社会系研究科博士課程単位取得退学。博士(文学)。'10より現職。'15より市ヶ谷学生センター長。'17より学生センター長。

**和氣節子**(わけせつこ)

神戸女学院大学文学部教授。'92神戸女学院大学院文学研究科博士課程単位

取得退学。博士(文学)。'12より現職。主著『ゴウルリッジのロマン主義』(共著)ほか。

**岡田龍樹**(おかだたつき)

天理大学副学長・人間学部人間関係学科生涯教育専攻教授。'89広島大学大学院教育学研究科教育学専攻博士課程後期中途退学。修士(教育学)。'17より現職。

**北條英勝**(ほうじょうひでかつ)

武蔵野大学副学長・人間科学部教授。東洋大学大学院社会学研究科社会学専攻博士後期課程単位取得満期退学。'14より私大連学生生活実態調査分科会長。

**音好宏**(おとよしひろ)

上智大学文学部教授。'90上智大学大学院文学研究科博士後期課程単位取得退学。専門はメディア論。主著『放送メディアの現代的展開』ほか。

**石田光規**(いしだみつる)

早稲田大学文学学術院教授。'07東京都立大学大学院社会科学研究科単位取得退学。博士(社会学)。早稲田大学文学学術院准教授を経て'16より現職。

**幸田拓也**(こうだたくや)

福岡大学学生部事務部学生課。福岡大学人文学部東アジア地域言語学科(朝鮮語専攻)卒業。'18入職。

**村上恵**(むらかみめぐみ)

同志社女子大学生活科学部教授。奈良女子大学大学院家政学研究科卒業。博士(学術)。'08同志社女子大学着任。'15より現職。主著『たのしい調理』など。

**渡邊紳也**(わたなべしんや)

東洋学園大学入試広報センター入試室課長補佐。ましましプロジェクトリーダー。

**高野嘉寿彦**(たかのかずひこ)

信州大学学術研究院総合人間科学系教授・同学系長・全学教育機構長。'91東京理科大学大学院理学研究科博士課程数学専攻修了。理学博士。'15より現職。

**小森陽一**(こもりよういち)

学校法人和光学園理事長。北海道大学大学院文学研究科博士課程単位取得退学。東京大学等を経て、'22より現職。著書『コモリくん、ニホン語に出会う』ほか。

**日幡亮二**(ひばりょうじ)

駒澤大学教育振興部。'02駒澤大学経営学部経営学科卒業。学士(経営学)。

**蘆田一毅**(あしだかずき)

京都橘大学総務部総務課長。関西学院大学法学部法学科卒業。民間企業を経て、'14に入職。

**石原雅子**(いしはらまさこ)

京都橘大学企画部広報課長。立命館大学大学院経営学研究科博士前期課程修了。民間企業、私立大学職員を経て、'21に入職。

**上坂孝博**(こうさかたかひろ)

学校法人桜美林学園事業開発部長。桜美林大学大学院大学アドミニストレーション研究科修士課程。施設管理、教務、学生募集、学生支援、就職支援、人事を経て現職。

**中里則之**(なかざとのりゆき)

立教大学総長室次長兼渉外課長。'89立教大学文学部史学科卒業。学生部、入学センター、教務部を経て'204月より現職。

**森岡大輔**(もりおかだいすけ)

拓殖大学工学部准教授。(株)日立ビルシステム等を経て近畿大学大学院生物理工学

研究科博士後期課程修了、博士(工学)。'19より拓殖大学工学部助教、'22より現職。

**加藤知**(かとうさとる)

関西学院大学副学長・理学部教授。'84名古屋大学大学院理学研究科博士課程単位取得満期退学。理学博士。名古屋大学を経て'92より関西学院大学。

**小林宣彦**(こばやしのりひこ)

國學院大學神道文化学部准教授。'05國學院大學大学院文学研究科神道学専攻博士課程後期修了。博士(宗教学)、'15より現職。主著『律令国家の祭祀と災異』。

**河北秀世**(かわきた ひでよ)

京都産業大学理学部教授・神山天文台台長。京都大学大学院工学研究科(情報工学専攻)修了。博士(理学)。シャープ(株)、群馬県立ぐんま天文台を経て、'05京都産業大学、'10より現職。

**森敏**(もりさとし)

'98長野オリンピック、'02ソルトレークシティオリンピック スキー・ノルディック複合日本代表。現役引退後、中京大学に入学。'10より東海大学国際文化学部で専任講師、'21

より教授。

**外川智恵**(とがわちえ)

大正大学表現学部教授。大正大学文学部卒業。カリフォルニア臨床心理大学院修士課程修了。'92山梨放送入社。「NIT技術ジャーナル」のトップインタビューなどを務める。

〈お断り〉本稿は、お書きいただいた資料から、できる限り統一して掲載いたしました。

会長の動き

- 11月7日(月) 松野官房長官来訪。オミクロン株対応ワクチンの接種推進について意見交換  
※「大学時報」第407号(2022年11月号)において、10月28日(金)に松野官房長官と意見交換を行った旨掲載しましたが、予定が変更となり、11月7日(月)の開催となりました。
- 11月8日(火) 第8回常務理事会、記者懇談会に出席  
鈴木財務大臣に令和5年度の予算・税制を要望  
岡田デジタル田園都市国家構想担当大臣をはじめ、国会議員に東京23区定員規制の撤廃を要望
- 11月10日(木) 経団連「採用と大学教育の未来に関する産学協議会」に出席
- 11月22日(火) 第8回理事会、第2回総会に出席
- 12月13日(火) 第9回常務理事会に出席
- 12月26日(月) 文部科学省・経済産業省「デジタル人材育成推進協議会」に出席

開催報告

- 11月8日(火) 記者懇談会
  - 11月30日(水) 令和4年度監事会議(オンライン開催)
  - 12月1日(木) 令和4年度第2回財務・人事担当理事者会議(オンライン開催)
- ▼各資料や開催の概要は、左記の私大連Webサイトをご覧ください。

私大連Webサイトにて  
各種活動に関する情報を公開

<https://www.shidairen.or.jp/>



私大連TOPICS

令和4年秋の叙勲・褒章

(私大連事業関係者)

◆ 旭日重光章

寺野 彰  
(獨協学園元理事長)

◆ 瑞宝中綬章

福井 憲彦  
(学習院大学元大学長)

金子 征史  
(法政大学名誉教授)

大澤 貫寿  
(東京農業大学理事長／  
元大学長)

石堂 常世  
(早稲田大学名誉教授)



University Current Review  
**大学時報**

Webサイトにて、  
**全文無料公開中**



詳細は

<https://daigakujihou.shidaren.or.jp/>

奇数月 20日(年6回)刊行

**第404号**  
(2022年5月発行)



【特集】  
**大学等における  
「STEAM教育」の取り組み**

【座談会】海外交流の新しい形—コロナ禍の先にあるもの—  
【インタビュー】木下昌美氏(妖怪文化研究家)

**第405号**  
(2022年7月発行)



【特集】  
**大学の  
サイバーセキュリティの現状**

【座談会】大学におけるダイバーシティ推進の取り組み  
【インタビュー】柴野大造氏(株式会社マルガー代表取締役、ジェラートマエストロ)

**第406号**  
(2022年9月発行)



【特集】  
**大学におけるVRの可能性**

【座談会】大学における修学支援—修学支援新制度の成果と課題—  
【インタビュー】大畑大介氏(元ラグビー日本代表、コベルコ神戸スティーラーズアンバサダー)

**第407号**  
(2022年11月発行)



【特集】  
**キャンパス移転で目指す  
新たな大学教育**

【座談会】“普段通り”をどう実行するか  
【インタビュー】青柳美扇氏(書道家、アーティスト、書道パフォーマンス甲子園アンバサダー)

座談会 「『サークル』の“今”と“これから”」

特集 「低学年次のキャリア教育」

小特集 「国際的な大学教育の展開と国際寮」

だいがくのたから

大学点描

クローズアップ・インタビュー

順天堂大学

立正大学

藤山大樹さん(手妻師)

## 編集後記

◆本学では毎年夏に保護者会を実施しているが、久しぶりのリアル開催に参加したところ、要望や質問がコロナ前と一変していた。以前は学業・就職・環境整備が主であったが、2022年の夏は断トツで「友だちがいない」だったからだ。現在の3・4年は、「長い」オンライン授業期間によつて、あるいはサークル活動の自粛要請の中で、他者とのつながりが極端に狭められてきた。

その「不安」は学生本人だけでなく、教員である私たちにもひしひし伝わっている。3年ぶりの泊まり込みの現地実習授業では、最初は距離感がわからずこわごわだった学生の顔が、みるみる生き生きとしたものに変わるさまを肌身で感じた。学年を越えた縦や同学年間の横のつながりは、新しい価値観と出会う学生生活の醍醐味の一つであつて、それは「リアル」のキャンパスライフによつてもたらされるものの一つだ。

もちろん、本特集の中にもあるように、デジタル環境を活用することも大切で、総合的に学生のつながりが生まれ、より活気ある大学に進化していくことを願う。へ広報・情報委

員会大学時報分科会委員・専修大学文学部教授 山田健太

◆卒業生は大学にとって心強い後援基盤であり、また、寄付を含めた在学生支援や地域や産業界との仲介など、大学の持続的な発展のためには欠かすことができない存在である。18歳人口の減少や大学全入時代の到来など、高等教育を取り巻く環境が厳しさを増す現在、卒業生の帰属意識を醸成し、更なる関係性強化に注力する大学が存在する。

本小特集でご紹介した4大学においては、著名な卒業生による講演会やトークイベントの実施、子ども向けアトラクションなどエンターテインメント性の高い企画、スポーツ大会や入学式など他の行事と組み合わせるなど、ホームカミングデーを開催するなど、オリジナリティ溢れる内容で同窓会を盛り上げている。

コロナ禍の経験を駆使してより多様な展開を見せる4大学の取り組みを通じて、ホームカミングデー開催目的の再確認や、卒業生との関係性強化策を再考する機会となれば幸いである。へ広報・情報委員会大学時

報分科会委員・津田塾大学経営企画課課長 五十嵐俊也

◆編集後記について考え始めた時、「大学時報」第393・394号(2020年7・9月号)に寄稿いただいた出口治明氏の原稿を思い出し、再読した。そこに提示された視点は、ウィズコロナ・ポストコロナの2つの時間軸で物事を考えること、大学という場で学ぶ意義を改めて問い直すこと等、当時とは状況が変化した今にも通じる多くの示唆に富んでいる。

本号の座談会・インタビューでは、学生の大学生活・競技生活の「時間」について触れる部分がある。未曾有の状況が有限の時間に与える影響の大きさを感じずにはいられない。しかし同時に、新たな課外活動の萌芽、対面する機会・時間をより深めようとする学生の意識変化等を通じて、柔軟な適応力を発揮し、今だからこそ、前向きに変化・挑戦していく学生の姿を知る機会ともなった。

新たな年——さらなる一步を踏み出す時を迎えようとしている。へ日  
本私立大学連盟事務局 加賀崎  
奈美



# 一般社団法人 日本私立大学連盟 加盟大学一覧

※ 大学名ABC順 / ※ } は同一学校法人 (123大学 令和5年1月20日現在)

愛知大学	関西大学	南山大学	園田学園女子大学
亜細亜大学	関西学院大学	日本大学	大正大学
青山学院大学	関東学園大学	日本女子大学	拓殖大学
跡見学園女子大学	関東学院大学	ノートルダム清心女子大学	天理大学
梅花女子大学	慶應義塾大学	大阪学院大学	東邦大学
文教大学	恵泉女学園大学	大阪医科薬科大学	東北学院大学
筑紫女学園大学	敬和学園大学	大阪女学院大学	東北公益文科大学
中央大学	神戸女学院大学	大谷大学	東海大学
中央大学	神戸海星女子学院大学	追手門学院大学	常磐大学
大東文化大学	皇學館大学	立教大学	東京医療保健大学
獨協大学	國學院大学	立正大学	東京女子大学
獨協医科大学	国際武道大学	立命館大学	東京女子医科大学
姫路獨協大学	国際基督教大学	立命館アジア太平洋大学	東京経済大学
同志社大学	駒澤大学	龍谷大学	東京国際大学
同志社女子大学	甲南大学	流通科学大学	東京農業大学
フェリス女学院大学	久留米大学	流通経済大学	東京情報大学
福岡大学	共立女子大学	西武文理大学	東京歯科大学
福岡女学院大学	京都産業大学	聖学院大学	東洋大学
福岡女学院看護大学	京都精華大学	成城大学	東洋英和女学院大学
学習院大学	京都橘大学	聖カタリナ大学	東洋学園大学
学習院女子大学	九州産業大学	成蹊大学	豊田工業大学
白鷗大学	松山大学	西南学院大学	津田塾大学
阪南大学	松山東雲女子大学	聖路加国際大学	和光大学
広島女学院大学	明治大学	清泉女子大学	早稲田大学
広島修道大学	明治学院大学	聖心女子大学	山梨英和大学
法政大学	宮城学院女子大学	専修大学	四日市大学
実践女子大学	桃山学院大学	石巻専修大学	四日市看護医療大学
上智大学	桃山学院教育大学	芝浦工業大学	
城西大学	武蔵大学	白百合女子大学	
城西国際大学	武蔵野大学	仙台白百合女子大学	
順天堂大学	武蔵野美術大学	昭和女子大学	
金沢星稜大学	名古屋学院大学	創価大学	

## 大学時報

University Current Review

2023/1月号

第72巻408号(通巻421号)

令和5年1月20日発行

編集人 音好宏(上智大学文学部教授)

発行人 植木朝子(同志社大学学長)

発行所 一般社団法人 日本私立大学連盟

〒102-0073 東京都千代田区九段北4-2-25  
私学会館別館

電話 03-3262-8672 FAX 03-3262-4363

<https://www.shidaiaren.or.jp>

編集 株式会社 WAVE

〒530-0001 大阪府大阪市北区梅田3-3-20  
明治安田生命大阪梅田ビル3階

〒104-0061 東京都中央区銀座3-10-9

KEC銀座ビル9階

松田美佐(中央大学文学部教授)

須藤智徳(法政大学多摩事務課課長)

中山映(上智大学学事局学事センター事務長)

依藤康正(関西大学総合企画室広報課長)

楊心来(関西学院広報室広報室長)

塩原良和(慶應義塾大学法学部教授)

江津英昭(明治大学経営企画部広報課長)

長野香(立教学院広報室長)

立岩健一(立命館大学総合企画部広報課長)

山田健太(専修大学文学部教授)

高橋慈海(大正大学魅力化推進部長)

大谷奈緒子(東洋大学社会学部教授)

五十嵐俊也(津田塾大学経営企画課課長)

鈴木宏隆(早稲田大学総長室募金担当部長)

齋藤淳(日本私立大学連盟事務局)

加賀崎奈美(日本私立大学連盟事務局)

森下真帆(日本私立大学連盟事務局)

